

## 横山桂子『露の朝顔』

江戸の武家女性が見た大坂と上方

藪田 貫

### はしがき

ここに紹介する史料は、国会図書館に所蔵されている、ひとりの武家女性の日記である。日記には、江戸から大坂へ上る道中が綴られ、その点ではひとつの旅日記ということもできる。近世の女旅日記の研究に新生面を切り拓いた柴桂子氏がすでに、労作『女旅日記事典』（二〇〇五）のなかで、本史料「露の朝顔」の一部引用し、「横山桂子は大坂町奉行の家族とともに江戸より中山道を通り、大坂へ向かう。道中木曾路が最も印象深かったのか、その旅日記には木曾路の描写が詳しい」と紹介している。

ところが後に詳しく見るように、本史料は五集からなり、最後の集には、大坂から江戸への東海道を通る帰路を描いた部分がある。また十二年近く暮らし、見聞した大坂の諸名所や年中行事を記した集もあり、さらに大坂滞在中に著者は、京都・奈良など近隣の名所を訪ね歩いており、それから「上方名所探訪記」と称することのできる集もある。それほどに本史料は多彩な内容をもつ。みずから「遠き東に生れ、ことにをみな身」と述べるように近世の女性が書き残した第一級の史料といえる。ここに全文を翻刻しようとする理由のひとつである。あわせて本史料には、武家女性の目からみた大坂論、あるいは上方論としての面白さがある。随所に「東とかはり」「東にまして」「東にても難波にても」という言葉がみられ、意識するとなく、江戸と大坂を比較しているのである。

本史料は縦二五センチ、横一七センチの横帳で、表紙に『露の朝顔 一』の題箋が付けられ、最後が『露の朝顔 五止』とされている。ところが内表紙をみれば、第一集はたしかに「露の朝顔 一」であるが、第二集は「旅路の花 二」とあり、さらに『露の朝顔 五』の内表紙には「東のつと 六」とある。したがって連続した作品でありながら、それぞれ独立した作品で、しかももともとあった「五」が欠けていることが分かる。欠本が逸生じたか不明だが、大正四年に、現所蔵先の国会図書館が購求した時点ではすでに失われ、整理の過程で『露の朝顔 五冊とされたものではないかと思われる（『国書総目録』も、それを踏襲し、『露の朝顔 五冊としている』）。したがって本紹介でも、タイトルとしてはそれを尊重し、内容紹介でそれぞれの五集の表題を用いることとする（写真参照）。

さて本史料の筆者を、『国書分類目録』は「横山桂子」としているが、史料そのものにその自署があるわけではない。わずかに第六集「東のつと」の末尾に、「玉の横山はむさし野の名処也、そをわか氏にかけ給へるなるへし」とあり、姓としての横山氏を証明している。

名前の手がかりは、本文よりも別のところにある。それは、達筆で書かれた「露の朝顔」を初めとする表題の下部に、**月の屋**の押印があること、第五集「東のつと」の末尾に付けた歌に「路子」の署名があることである。『大日本人名辞書』に横山桂子を紹介して、つぎのように述べている。閨秀歌人、横山平馬の女、通称はみち、月屋と称す、本間遊清に学び、

歌を能くす

「月前紅葉 あかぬかな月すむ夜半に散る紅葉かつらの花のここのみして」の歌、畏き辺の御聴に達し、自今月の桂子と称すべき由仰せ下されたりと言ふ、安政二年八月二十日没す、五十六歳

これによって、本作品の著者が「横山桂子」であることは疑いないが、この作品の段階ではまだ、「横山路子」というのが適切であろう。さらに路子の歌に返す形で末尾に、異筆で歌が書かれているが、それには「遊清」の名が見える。これこそ、本間遊清である。したがって本史料の著者を、横山桂子とすることは十分に説得的である。ならばつぎに、この作品がどういう契機で書かれ、何が書かれているかを解き明かすべきであるが、それは各集を紹介する中で明らかにしたい。

さて、本史料は前述のように五集からなり、原題とそれに付けられた番号を列記するとつぎのようになる。

「露の朝顔 一」「旅路の花 二」「蘆の葉風 三」「有明の月 四」「東のつと 六」

以下、それぞれについて概要を述べる。

**第一集「露の朝顔」**は、筆者桂子が「敷島の道」「和歌の道」に入門するに至った経過を述べた部分と、江戸を立ち、大坂に到着するまでの道中を記した部分からなっている。

桂子が和歌の道に入るきっかけは、二十歳前に伊予国吉田藩伊達家（知行高三万石）の江戸屋敷に、伊達候の姫君の琴の師匠として「宮仕」に入ったことにあった。和歌好きの姫君の母から詠草を勧められて学び始め、同家の「おもとくすし」、すなわち医者であった「師の君」の導きを得て、本格的に始めたと思想している。この「師の君」こそ、本間遊清である。『和学者総覧』は、本間を紹介して、

村田春海門、伊予吉田藩医、嘉永三年八月十六日没、享年七五歳と記している。

桂子は没年から計算すると寛政十二（一八〇〇）年の生まれで、二〇歳前という文政元（一八一八）年か二（一八一九）年になる。当時、本間

は四二、四三歳である。

歌の指導を受けた桂子はある日、生家のある深川に帰った折、朝顔をたくさん作り、見せる人がいるとして訪ね、そこで詠んだ歌「とくおそく来てみる人のあまたあれは 露のひるまも咲る朝顔」を「師の君」に見せるが、賞賛され、それを機縁に歌詠みを始めたと思している。第一集の原題「露の朝顔」が、この歌に因んでいることはいうまでもない。こうして「師の君」本間遊清との歌を介した交流が始まったが、さらに江戸と大坂で離れ離れになることで桂子は、各地各地で歌を詠み、それを「師の君」に送るという動機を得たものと思われる。その意味で本史料には、桂子自身の日記という側面とともに、「師の君」との和歌の交換という側面もある。

吉田藩伊達家の江戸屋敷は八丁堀にあり、「宮仕」の間、桂子は深川の生家を出て、そこに暮らしたと思われるが、その奥勤めの間に、「かめ子といへるおもと」と出会い、深い友情を育てる。「たらちねのはやくもわらはか身のよすかもとめ給へりとて、よしあししらぬ難波へおもむかん事を言しらし給ふ」との一節は、のちに難波に行くきっかけを示していると思われるが、それは親友かめ子によってもたらされた。その後、その話は姫君の耳に入り、「身の落付とて速に御暇給はり」、桂子は「年比なれにしまち」を辞し、生家に帰ることとなった。

桂子が生家に帰ったのは、文政三年四月の初めと記しているので、伊達家への奥勤めは一年か二年と思われる。興味深いことに、主人である内藤矩佳に大坂町奉行補職の命令があったのも、文政三年四月の初めである。しかし桂子はなお江戸におり、幼少のときから教えを受けた琴の師匠を訪ね、内藤の屋敷に入ったのは、六月半ばである。この時に触れて、「こはこたひ難波の町のにひ司にならせ給へる君なれは」とある。内藤が大坂町奉行に任じられたことを指すのは、いうまでもない。

しかしながら父である横山平馬が、町奉行内藤矩佳とどういう関係かは、これでは分からない。幸い大坂町奉行をはじめとする在坂役人については、「大坂武鑑」と総称されるものがあり、そのひとつ『浪華御役録』の文政七年年頭版に、西町奉行内藤矩佳の公用人として「横山平馬」の名

が見える。こうして桂子は、「我仕へます君」と同道して母とともに大坂に上ることとなる。

七月五日に江戸を立った桂子は、奉行の一行とともに中山道を行き、二十日の深夜に大坂に到着、西町奉行屋敷に入った。父が上坂するのは、八月のことである。

**第二集「旅路の花」**は、冒頭、「はやくも年かわりて、春のはしめのまうけ、何くれと我なる郷とハかわり、みたこと聞ことをかしきふしもいとおほかり」と、異邦人として大坂の町を体感していく様を記す。このような江戸人としての大坂観が、じつは本史料が大坂研究にとって価値をもつ点である。

西町奉行所は、東横堀を渡った本町橋のたもとにあったが、「我住いの前は松屋町すちとて右の方は天王寺道、左のかたは天満の行末なれハ、ひねもす行かふ人引もきらす、賑はしたいふ斗なし」と桂子は証言する。

ところが第二集は「旅路の花」は、その表題から伺われるように、旅日記が主題である。したがって大坂を起点とする旅が描かれるが、それは京都・奈良への旅である。しかもそれには伏線があった。遅れて大坂やって着た両親が文政三年の十月、「紅葉の比をたたにや過む」として京都に紅葉見物に出かけたが、自分は行けず、翌年の「春にも成なは、わらはもともなわせ給へ」との希望を抱いていたのである。

文政四年春三月十一日、桂子は母を伴い、京都へと旅立つ。八幡・伏見をへて向かったのは嵐山。そこでは藤原定家の名が頻繁に出る。その後、松尾をへて市中に入り、知恩院・平野社・北野社・御室社の桜見物が続き、三月末まで京都にいる。翌四月一日早朝、「都も大かた見へつるに」と、栗田口から山科をへて近江に入り、三井寺・膳所・石山寺を廻る。そして京都に戻るが、帰路につくのは四月十二日。ところが帰路は東福寺から宇治をへ、さらに木津川を渡り、一路、大和に入るといふもので、奈良でも見物を楽しむ。その結果、法隆寺・信貴山を通過し、河内若江から玉造をへて、役宅に戻ったのは四月十六日である。じつに一ヶ月を超える長旅である。

**第三集「蘆の葉風」**は、そのタイトルからも伺えるように、大坂生活を

詠んだものである。「おし照難波の里に十とせばかりの春秋をおくりつれは」とある冒頭の一節からすれば、十余の大坂暮らしを経て、書かれたものであることが分かる。正月二日早朝の水菜売りから始まり、以後十二月までの大坂の年中行事の紹介というスタイルを取るが、「一とせ陸月二十日に西宮の御神のまうてぬ」のように、大坂近辺の地への小旅行記を随所に嵌め込んでいるのが面白い。一月二十日出発の西宮参詣は、役宅門前から船に乗り、大阪湾を渡り尼崎で上陸、帰路もまた船というものである。そして二月初午、四天王寺の聖霊会、三月の雛祭りにつづき、三月初めには住吉大社詣でが来る。さらに「一とせ弥生半はかり河内の国なる葛井寺より処処にまうてん」と、西国五番の葛井寺を皮切りに、誉田八幡・壺井八幡・通法寺・叡福寺・西方院・玉手山・八尾勝軍寺の諸寺社を廻っている。そして四月の初めには、野崎観音詣でが来る。春の到来を待って、大坂近辺の名所に足しげく通っている様が目に浮かぶ。また、『河内名所図会』を手にしたの旅行であったことを伺わせる記述もある。

その後、小旅行はさらに六月一日の愛染堂から新清水寺・一心寺への参詣、九月半ばの住吉大社参詣があるが、いずれも日帰りの旅である。「一とせどこそこ」とあるように、十年の間に楽しんだ小旅行を巧みに配すること、大坂市中の年中行事と自らの名所紀行の合作となっている。

大坂市中の紹介では、桜ノ宮を初めとする桜の名所を紹介した三月にひとつのピークがあるが、四月の花供養と東照宮祭礼、五月節句につづく六月の夏祭りに紙数が割かれている。「大舟小ふねさしつとひ、ともしつれたる其の影は星よりも猶しけく、天にかかやき名をてらし、さながら昼にことならず」とその情景を描きながら、「花火の目さましき東なるふた国かけし橋のもとにもはるかにまさりぬ」と、淀川の花火を両国の花火と比較する。ほかに「霜月道頓堀歌舞伎の賑はい東にましていと目覚し」など、大坂市中の叙述となるといやがうえにも、江戸との比較熱が高まっている。

また四月十七日の東照宮祭礼や八朔の惣年寄以下町人たちによる奉行所詣など、武家女性として正確に観察している情報にも得がたい価値がある。

第四集「有明の月」も、「一とせ此御寺にもうてんとて」とあるように、西撰の名刹中山寺を参詣したときの旅行記であるが、三月二十一日から二十六日という、かなりの日数を要した旅であった。それが同じスタイルをとり、かつ丁数も少ないながら、第三集の一部とするのではなく、独立して第四集とした理由であろう。

三月二十一日に出発した桂子らは、十三・神崎の橋を渡り、陸路、伊丹・昆陽を経て中山寺に向かう。この時も弥生三月は桜の花盛りで、「八重はまたしきほとにひとへハ今はさかりと咲みたれ」「朝日ほのほのときし出るにも花も一きはの匂ひ」などとその様子が名文で描かれる。「中々に画にも移しかたからんとそおほえぬる」とは桂子の言であるが、いまならさしずめカメラというところだろう。

二十一日中山寺近くの旅宿に泊まり、翌二十二日は西国街道の宿駅生瀬をへて有馬へと向かう。翌二十三日には湯女を伴い、つつみの瀧・有明さくらを指す。そこで詠んだ歌「有明の月と名におふ山さくら」に、第四集「有明の月」が由来しているのは間違いないだろう。そして二十四日には常喜山に参り、二十五日中山に戻り、二十六日帰阪となる。「石道のけはしきは乗物の中すら安からぬ」「人すくなにて行」との記述は、彼女たちの旅の姿を描いて貴重である。

最後の第五集「東のつと」は、文字通り、江戸への帰路を綴ったものであるが、冒頭に記されている出府事情が注目される。その発端は文政十二年三月七日、江戸から内藤の許に届いた「めしふみ」にある。出府の命令を受け、役宅はただちに準備に取り掛かり、「上下こそりてそのまうけいしかし」。九日には出府の町触、十一日は出入り人との別れを済ませ、十三日早朝の出発となった。ところが桂子らは「残らせた給ふ女君」らとともに後続部隊となる。準備を終えたと、「いさや難波の名残とて」三月末、鶴満寺と崇禪寺への参拝と桜見物となった。さらに四月二日には難波村の酒楼「松の尾」と「大津湯」に上がり、瑞龍寺に寄り、道頓堀から船で帰っている。

その後、四月六日には内藤が「大うへのいとこよなき司」勘定奉行を任せられたとの報が届き、十一日に出発となった。「家の隅々見めぐりはた

庭の本草にまで名残をしむ」とは十二年の長住まいを考えると正直な感想であろう。

帰路は役宅を出て、松屋町筋を北上、天神橋の畔を右に折れ、京橋・片町をへて京街道に入る。以後東海道を通り、江戸には四月二十四日の着となるが、その間の紀行文については史料に直接、当たりたい。しかしながら記述は江戸帰着で終わっていない。その後、「師の君」である本間遊清との再会が記されているが、さらに注目すべきことに、十二年十一月、人を介して、「都なるやんことなくわたりにしるへ有は歌書いてささげよ」との誘いがあつた。さらに翌十三年一月、「都なる彼わたりよりわらはか歌愛させ給ふよし」との知らせが入っている。それはすべて「師の君」の導きのよろしきためであると桂子というが、これによれば在坂中に、和歌の才が京都の知れ渡っていたということであろうか。「路子」が「桂子」となるきっかけは、十二年に及ぶ大坂暮らしにあったと推測されるのである。

(付記) 翻刻に当たっては、原文を尊重し、①改行は和歌を含め原文通りとすること、②正字・旧字を含めできるだけだけ原文とおりにすることを基本としたが、読みやすさのために適宜、読点を入れた。抹消部分は、見せ消しであつてもすべて抹消として扱った。

なお、日記の解説については、橋本猛氏のお世話になった。付記し、あわせて深甚なる謝意を表したいと思う。

はやう敷鴛の道ふみ分みんと思ひ立し其  
はしめは、いまたはたちにたらぬ年の春  
きさらきの比、伊豫の国吉田の里しろし  
めす君の姫うへの糸竹の御あそひかた  
きにとて、めさせ給へりしか、彼姫君の  
御母公、和歌をこのませ給ふ事こよなく  
まし／＼て、御まへちかき人々はさら也、姫君  
の御もと人たち、わらはことき物にまでも  
よましめ給ふ、され共わらはいとけなき比より  
糸竹の道のみまねひて、手かく業に  
うとければ、かゝる事まなはんハいとかたき業  
にこそとおもへとも、おなし御もと人たちも  
いとねもころに聞えけるまでに、いさ、か  
まなはん事をおもひ立しに、師の君もいと  
いたうつくしませ給ひて、うらなくをしへ  
道引給へるそかしこくも嬉しき事也ける、師の  
君と申は此みちに仕へ給ふおもとくす  
しにおはし、か、和歌の道にこよなうひいて  
給へりける、其比我里なる深河に朝顔  
おほく作りてみする處ありと人二いひあへり  
しかは、ひと日里にまかりおりしころ  
かの花見に行んと其まうけせしか、何くれと  
か、つらふ事侍りて時のおくれしに、早朝顔ハ  
さかり過つらむなと人の言にいそきて  
かの處へおもむきしに、いまた色よく咲たり  
しかは

とくおそく来てみる人のあまたあれは  
露のひるまも咲る朝かは

とよみて、師ノ君に見せ参らせしに  
こよなうめてさせ給ひき、是なむ我おもふ  
ふしをみるま、にのみ出し始なりける  
其後、墨田河の花屋しきに、世に  
聞えし秋の七艸みむとて師の君も共に  
行せ給はんとの給へり、しかとさはる事  
おはして行せ給はず、わらは里なる母と共に  
まかりて帰て後、師ノ君に参らせける

七艸の数ハみつれといづくにか  
ひと花たらぬこ、ちこそすれ  
師の君より御返し

花数にあらぬ此身を花数に  
かすまへにけることそうれしき

七艸の花より外に今ひとつ  
匂ひ出たる君かことの葉

とよませ給へりしそいと嬉しかりける、かゝる  
をさなき我歌を書とめんハおもなけれと  
はしめてよみつる哥とて師の君のめて  
させ給へりしうれしさにこゝにするしぬ  
かくて秋も末つかた、みそのなるなへて  
の木々のいとうるはしく流なしたる中二  
殊に師の君の愛させ給へる楓の落  
ちりたるをひろひて

みせはやな一葉なりとも散まゝに  
くちなはをしき園のもみち葉  
た、一葉おくるもみちの色をたに  
ふかしといは、嬉しからまし  
と書て参らせければ

一葉とはおもはさりけり紅のちし  
ほの色を底にふくミテ

君の手にひろひとらすハいたつらに  
散てくちなむ園の紅葉

と御かへし給はりける、其後一とせ餘り  
を経て、かめ子といへるおもとをめさせ給ひ  
けるか、いかなるえにしにや有けむ、其始  
よりかたみにむつひかたらふ事古き  
おもとたちにまさりけり、かめ子ハ我より  
年ふたつミつまされるに、其さえはた  
かしこく萬の業にたけ給へれば、何  
くれとかの人に随ひて、只はら  
からのおもひをなしてむつひかはしつるに  
たらちねのはやくもわらはか身の  
よすかもとめ給へりて、よしあししらぬ難波へ  
おもむかん事を言しらし給ふ、わらはいま  
しはし宮仕へし 彼敷しまの道の  
奥をも分ミむとおもひをりければ、かゝるえにし  
もとめん事軒のすたれのさら／＼におもひ  
かけねはと、みにいらへもせさりしを、信野  
なるそのはらからもうちつとひととき聞え  
給ふを、稲舟のいなともさすかいひかねて、そか  
まに／＼女君へ聞え上奉りしに  
身の落付とて速に御暇給はり、猶数々  
の物なとめくませ給ふそいともかしこき  
わさなりける、かくてみたちをまかりおりんと  
するほとに、かめ子をはしめおなし  
おもとたちのひと日ふつかとめけるに  
心ならずも日をおくるほと、比は弥生の末  
つかたなれは御園の山吹いとうるはしく  
咲たるを、さすかに見捨かたくおもひて  
とく暮て行へき春を山吹の花の

なさけそうれしかりける

かめ子のとめ給ふ心をうれしみかくいひ  
出ければかめ子

をしめとも暮行春は山吹の色に

出つゝくちなしにして

と有けれハ、亦かへし

口なしと君はみるらめ山吹のいはぬ

こゝろをおもひやりてよ

なといひて有しに、かめ子よりすみれのいと  
うるはしく咲たるをおこせければ

すみれ艸別て後もしのへとや

ゆかりおほゆる色に咲らん

かめ子返し

むらさきの露のゆかりのかひあらハ

君と野もせにすみれつまゝし

また是より

諸共に野邊にすみれと聞えたる

君か言葉の花そうれしき

など言出つゝ有けるに、里よりハせち二  
むかへをおこせ給へは、さのみハとてまかり

おりんとするほとかしこくも、年比おほん

めくみあつかりしあたりの御別の

をしさはいへはさら也、はらからとも思ひし

かめ子にわかれん事今さらかなしき

やる方なく、かたみに袖をしほりつゝ、

末の松山猶行末をちきりつゝ、物思ひける

花になれし春に別てなくくも

ふるすへ帰る谷のうくひす

はかなき事とも言出つゝ、やかてまかり出に  
けり時は文政三といへるとしの卯月の始也、

里なるたらちねはからは待喜ひ給ひ、

只まらうとのあつかひし給ひ、はた年比の

宮仕の労を言なくさめ給ふ、ミかよか過て

かめ子のもとより消息して

別てはおなしあつまのうちながら

草の心にまかせさりけり

難波へ行せ給は、いかに、なといひおこされ  
ければ

心にはまかせされともとる草に

かはらしと思ふ君かためには

其比、師の君の御もとへ惜春更衣といふ

事をよみて参らせけるに、年比なれし

みたちの事のわすれかたければ

過しつる日数は夢のこゝちして

さめてかひなくをしむ春哉

とめきつるきのふの花のなれ衣

心に染てかへうかりけり

卯月半の比、我をさなきころよりをしへを

うけし琴の師のとひければ、人々

うちつとひあはせ物なとし侍りけるに

時鳥の鳴ければ

我ごとく人もまては歎ほとゝきす

けふのまとゐにもらすはつ聲

琴の音になれも心やひくならん

あはれをそへて鳴ほとゝきす

はやくも日数帰りて水無月半の比ニ

此みたちへはうつりぬ、こはこたひ、難波

の町のにひ司にならせ給へる君なれば

其御まうけいみしう、目おとろくはかり也

はた下かしもまておなしまうけに

いとけなけれど、わらは久しく宮仕にのみ

ありければ、世の業にうとくしてせん

すへなし、かくうたてきまで思ひまとへる

中に、かしこくも師ノ君より御消息給はり

うまのはなむけとて数々のしな給はり

とく行てとく帰る日を住よしの

岸に生てふ松としれ君

浦の名のすみよしとてもふるさとを

わすれ貝をはひろふなよ君

とよみて給はりしそ、いと嬉しくも有難かり

しされとも、かゝる中なれば御返しもし

侍らす、難波へ参りて後こそまうしてやみぬ

扱こととゝのひて、木曽路より難波へとて

東をうちたちは、文月はしめの

いつかになむありける

難波江のよしあししらて立出る

旅のころもそいとゝ露けき

帰るへきほともさためぬ旅ころも

立わかれうき氣ふにもある哉

里なる母も共に行けるに、うひ旅の

ことにしあれば、いかにとせんとすへしらす

只人々の物し給ふまにくうちつと

ひて行ほとに、残るあつさ絶かたし

行ゝて戸田てふ河のほとりにいたれば

河風いと涼しく、かなたこなたの野邊に

虫の聲ひまなく聞ゆるもけにや秋の

けしきしるく、旅のあはれもいとゝそひて

河風の音あはれなる夕暮を

いかにせよと歎虫の鳴らむ

梢に蟬の鳴ければ

かしましく梢に蟬の鳴聲に

旅ちのうさもかつまきれけり

文月なぬかに、何てふ處に歟有けむ  
いともあやしき賤か家に七夕まつり  
たる、いとあはれにおほえければ

心なき身にさへあはれ星まつる

賤か手わざのにくからぬ哉

ふる郷にあらは、今宵星まつらんと  
おもへは、いと、東の空なつかしくて  
家にあらは星に手向むも、草を

旅の枕にかかるそわひしき

桔梗か原てふ處を行に、いとひろき

野にて撫子をみなへしなと目もあやに

咲みたれたり、かゝるけしきをふる郷なる

師ノ君かめ子諸共に見もし分もせし

んにはなと思ひ出て、かたはらなる人して

此花を、らせて

手折つる千艸の花の露ほども

ふる郷人にみせんよしもか

別路のかわかぬ袖に露そへて

手折にもろき女郎花かな

手折つる小萩か露に袖ぬれて

ふる郷人そいと、恋しき

心ある色歟あらぬ歟旅ころも

やつれし袖にすれる月艸

木曾の山路のいとけはしき中に

藤はかま薄など、をりえ顔に咲たる

いとあはれにみえければ

秋風の吹立ぬれはふちはかま

たれきてみねとほころひにけり

秋風に何まねくらん旅人も

まれに木曾路の山の薄は

なといへるを母の聞て

藤はかまほころひにけり色もかも

名におふ山のはつ秋の比

ともなはせ給ふ君の北うへは千勢子の  
君と申奉り、和歌をこのませ給ひけるか  
ななき旅ちの御つれくに、御かたはら  
にさふらふ人して御消息たまはり

寄道祝いといへる事をよみてよとおほせ  
言あるに、今此君につかへ奉る

はしめなれば、青柳のいとななき

御めくみをねき奉らむとて

動なき道のさかえと此君の

めくみハ千代も尽せさらまし

とよみて奉りければ

幾千代を松の常盤にちきり

つ、おなしみきは和歌の浦人

と御返し給はり、道にてをらせ給へる

菊の花給はるとて

おく露のそむるは秋のしるしにて

みねにもかをる菊の一もと

とよませ給ひければ

色も香も深き山路の菊の花

手折し君か袖そゆかしき

雨そほふる日、みたけてふ山の中にて

つくくとふる郷をしもおもひ出て

旅ちのうさもはれぬ雨かな

つとめてやとりを立出て、空やうくしらみ

行ころ、遠こちの山あひより朝けの烟

立のほるを見て

遠こちの朝けのけふり立みれば

人すみけりな木曾の山中

野中に一本たてる松を人のゆび

さして、こは相生の松とて其

名高しとをしへければ

年を経てふる郷人にあひ生の

名もむつまじき松の一本

西行上人の塚也とて、いとふりたる碑の  
ありければ

古しへの人の心のおのつから

ふかさしらるゝ有る塚そ是

山より山に日をかかねて行ほとに

右のかたは、木曾河の流れいとはやく

名すみ、石さへなかるゝさまいとすさまじ

左は山より山のかさなりて、蔦かつらはひ

まつはりたる中にことに、高き山の

いたゝきより藤もてなひたるにや、ふりたる

縄のなかはよりきれてあり、是なむ其

昔より言傳ふるかけ橋の跡なりと人

のいひければ

かけ橋や其名はかりは蔦かつら

今もしからむ木曾の山中

此處にはせを翁の碑あり

かけ橋や命をからむ蔦かつら

寢覚の床といへるは、臨川寺てふみてら

の庭より見おろす處にて、大なる岩

あり、其色青々としていとなたらか也

したなる谷河ハ其流れはやくして

音は只耳をつらぬく斗也、向ひは山々

かさなりて、そのなかめまたいはんかたなし  
ふる郷の夢も中々谷河の

音に寢覺の床といふらむ

小野の瀧は、山より流れ出て谷河へ落る二  
只し糸をうちみたせしかと思ふ斗なり

なかれてもかく斗とはしら糸を

くり返したるをの、瀧川

猫山つゝ、き行ほとに、山のすかたの  
ひとしからず、あるは青く或はくろく  
けはしきあり、またなたらかなるあり  
をさなき比より、画などにてみたる  
とはことなるさまにおほえければ

朝夕になれてしみれと遠こち

の山のすかたはことにそ有ける  
大あてふ處にやとりける夜、文中の  
五日なりしか、軒ちかき山のはよりほのく  
さし出る月いとあかゝりけるに、木曾路は  
月の影ぞみしかきとよませ給へりしも此  
あたりにやと、いにしへ人の言の葉をすゝろ  
におもひ出て

山ちかみ其いにしへの言の葉も

こゝろにうかふ秋のよの月

澄月もすめるこゝろもかはらぬを

東の空の恋しきやなそ

十六日は加納といへるうまやにやとりぬ、爰は  
永井の殿の御城下にていと賑はへり  
十七日またきにこゝを立出、河渡といへる  
駅に至る比は巳の半成へし、しはし爰二  
いこふほと、今行へきなまず縄手てふ處  
此比の雨にて水あふれたりといふに、ふた時

あまりを経て、からうして水おちてこゝを過つ  
れは、其夜の夜中過る比に柏原へは

着ぬ、夜に入て山ふたつミつこえつるか  
昼たにすさまじけなる山路を、あやめも  
わかぬ夜に松ともして行其物すこさ  
亦たとへんかたなし、かくおほやけの  
おきてさせ給へるたに夜の道はおそろ

しきを、まして只人の行暮せるさま思ひ  
やられぬ、爰に美濃路とあふみ路との  
境に寢物語としるしたる枕立たれと  
夜ハにしあればさたかにみえすいと口  
をし、其外車返し坂不破の関なむと  
道の行手ならねと、よそなからたに聞  
へきを夜の道は、只人々の行なやむのみ  
にて何てふ事もしらす、とのみこたふる  
はせんすへなし

十八日朝またきに柏原を立出て行に  
醒か井の清水とていと清き水有、行々て  
磨針てふ嶺に登るに湖はるかに  
見おろし、其けしきたとふるに物なし  
爰にしはしいこひて、夫より鳥居本  
てふ駅を過る、こゝに多賀の社の一ノ鳥  
居有、けふは武佐てふ駅にやとる

十九日またきこゝを立出、鏡の宿など過る  
に鏡山三上山はるかにみゆ  
草津のすくには難波より迎ひの人々おほ  
く来ル、玉河の跡なと過て大津二やとる  
廿日爰を立出、行々て関の清水のほとり二  
しはしいこひ、右に関明神の御社を  
拝し、追分より伏見に至る、夕舟に

うち乗て難波におもむくに、音に聞し  
淀川の流れいと清くして、長き旅ちの  
うさも爰にうちなかしぬる心ち

せられける、夜更るまゝに山のはの月  
いとさやかにさし出ければ

ふしなれぬ淀の河せを舟の中に

あふきてそみる山のはの月

ふる郷を立出しよりいくはくもあらぬに  
はやくも難波に來にけるよとおもへは  
すゝろ涙さへ落る斗におほえければ

行舟の棹のしつかやかゝりけむ

いつしか袖に月そやとれる

十あまりなゝつの日数ふる郷をおもへハ

遠くへたてゝそ来し

子過る比、舟難波に着ぬ、爰の私たちハ  
おもふにましていときらやかなり  
大君はきのふ大津より都へまはらせ給ひ  
しに、けふひつし斗に此みたちに  
着せ給ふ、大君つかせ給ふを待奉りて遠こち  
人のうちつとひはせ参るさまいとかまひ  
すし、こは長き旅路にことなく来ま  
し、ことふき申さむ為来へし、猶我  
とちの家々にも人おほくむれ来る

さまいと目覺しされとも、東にことかはり  
人の物いひさまなと耳なれぬ事のみ  
なれは只うちまものみにて、せんすへしらす  
そもく東を旅立てより爰に來着まで  
道すから名におへる處々のさま見もし  
聞もしつる事はたしのひかたかりし  
有しなとおもふかまゝ、にあやなき事共



言出たるを、難波に着し後、かいつらねて  
東なる師ノ君の御もとに参らせて御筆

くはへさせ給へよ、こは我復々まで侍らんと  
申し、に、師の君の我も後の思ひ出二

せまほしければ、此ま、我にえさせよ

とて返し給はす、筆そへさせんとならは  
外に書て来せよと有つれと、旅にて

かいつけしは、いつちにけむみえす成  
たれはせんすへなくてやみぬ、おもふに

こは我つたなき事ともかいつけて、いか  
なるひまにも人の見給ふ事あらは

中々にはぢか、やしき業也とて

師ノ君のいましめ給ふにや有えむ、そは  
心もつかずして雁の行来のをりく二

難波の浦のうらみこち参らせつるそ

おもなき業也ける、されと猶こりすまに  
思ひ出るかまにくゝ爰にしるしぬれば

遠こちのさまもはた名處もおほくは

わすれて跡さきにや成ぬらんかし、其後  
師の君の御もとに旅中にてつめる

草の花をおくり参らすとて

みせはやよおもふ心はかはらねと

移ろひにけり花の千草ハ

長月半の比、師ノ君より御消息給はりて

日をへたる色こそ今はあせに

けれ心の花の香は深くして

其比、庭の梢の紅葉しけるにこそ此比  
東なるかのみたちの御園へ楓の若はへを

うゑおきつるか、此ころハ染初つらんなと思ひ  
出るまゝに

こかれてもみるよしもなきふる郷の

紅葉吹こす秋風もかな

とおもふ有しを書つけて師の君に  
参らせしに、かのみその、紅葉也とて

いとよく染たるをおくり給はすとて

ふる郷をわすれ艸には是をみよ

君かうゑつるその、紅葉

とよせ給へりしはいとうれしくも、また  
涙落る斗にふる郷のなつかしさも

いやまさりてそおほえける、いぬる葉月の  
ころ、里なる父も此難波へ来給ひて、母

諸ともにおはし、か、此紅葉の比を

た、にや過む、いさ名におへるあらし山  
通天なと行てみはやとて、神無月始に

母刀自をそ、のかして、都へとてうちた、せ

給ひしかは、日を経て父参らすなへに

露しくれかる紅葉を手折

つと帰てみせむ君をこそまで

御返し

露時両袖にかけつ、我を待

人のためにとをれる紅葉

霜月末つかた難波へ帰せ給ひて、都の  
さま何くれとかたらせ給ふに、いと

めつらかなる事のおほければ、春にも

成なは、わらはもともなはせ給へなといふ

ほと、ひと日雪のふりければ

こそ待し心には似す初み雪

ふる郷をのみおもひつ、けて

其としもはや暮に成しかは

玉ほこの道行人のおとなひも

いとなくみゆる年の暮哉

露の朝顔 終



## 旅路の花 二

### 旅路の花

はやくも年かへりて、春のはしめのまうけ、何くれと我なる郷とハかはり、みたこと聞ことをかしきふしもおほかり、されと人のいさましけに行かふさま、はたわらはべうちつどひ、手まりなんどもてあそひさも嬉しけなるさまなどは、異なる事なくみゆるもいとをかし

誰里もかはらさりけりあら玉の

年のはしめの人のこゝろは

睦月十日、今宮の夷の御社いと賑はしちかきあたりの舞びめらいときらやかによそほひて、出るをみむとてつどふ人とおほし

おなし月の末のいつかには、天満てふ

處にたゝせ給ふあまみつ御神の

みやしろにまうつるもおなしさま也

中のむゆか天王寺にまうつ、爰も

いと賑はし、我住ゐの前は松屋町すちとて

右の方は天王寺道、左のかたは天満の

行末の道なれハ、ひねもす行かふ人

引もきらす、賑はしさいふ斗なし

きさらきはしめの午の日には、みたちなる

稲荷の御社に諸人詣ることをゆるし

給ひて御園の中を過て、からめてより

おもてのみもんにいづ、はたみそ、の中

には花やかなる物ともつくりおかせて

みせ給へれば、遠こちよりむれ来る人いと

目覚る斗なむ、猶ことのおほけれとおろかなる筆もて尽すへきにあらすかし

弥生半ばかり、いさ都へとて母のともなはせ給へは、彼淀川を朝舟にうち乗て

行ほと河のほとりにたてる柳は、只

緑の糸をうち懸たるかとみゆるまてかなた

こなたに打みたれ、水に移ろふ

さまいとをかし、遠くのそめは廣き野に

咲みたれたる菜の花の河風のさと吹、ことに匂ひ来るもまたこよなく、おなし

さまなる舟にて行もすくなからぬは

こは皆ちかき国々より花の都の花みむ

とて行にそあるらしとおもへは、むつまじ

き心ちせらるゝも旅のならひならむかし

申のさかりに橋もとてふ所に舟はつ

爰は八幡の御山の麓也、

十二日またきに御山にまうづ、いと

けはしき坂路をからうして登り、いとも

かしこきみやしろを拝し奉りて

男山さか行嶺の松風に

高き恵のほとそしらるゝ、

爰をくたりて淀のまちを過、小橋をわたり

行に、左の方はるかに水草みゆ

淀つゝみを右にそひ行々て、ふし見の

町なる御幸の宮にまうづ、いとふり

たるみやしろ也、右の方なる小門より桃

山にいづ、爰は昔の御城跡なるよし

道の行手に咲つゝきたる桃のいと

まはゆきまでうるはしきに、しはし

いこひてたにみむとおもへと、さるへき家居も

あらねはせんすべなくて

立てみつゐてみつあらぬ花なれハ

ふしみの桃と世にはいふらむ

夫より伏見の駅を過て稲荷の御社藤の

杜東福寺など打めぐり、五条橋より境町

なる亀屋といへるやとりに着ぬ

十三日またきにこゝを立出、あらし山の

花みむとまかりしに、をちこち人の群

行さまげに花の都ぞかし、三条通りを

すぐに行々てあらし山の麓に至る、

前に大の河てふ川にそひて向ひなる山の

さくらは今をさかりと咲みたれたり

大の河花のしら波立るとも

みきはのさくら咲みたれけり

ちらぬまの影を移して大の河

いかたにかゝる花のしら波

其名さへいとはるゝ哉あかす思ふ

あらし山の山の山さくら花

いかたしよ心してさせ大井河

流るゝ水も花になる比

こゝにわたせる橋を渡月橋と言ければ

あらし山花にも人の行橋を

なと月とのみ立渡しけむ

山のなから斗にいとさゝやかなる流れ

あり、こは戸無瀬の瀧といへると聞て

絶す落る戸無瀬の瀧ハ山の名の

あらしとゝもに世にひゝく也

おなし所に水無瀬の瀧とてあり

しか今は名のみ残れりと人語けれハ

其名のみ水無世の瀧も春はた、

絶す流るゝ花のしら波

大る川の右の方いと広く、竹垣ゆひ

めくらせる藪の中に、小督仲国の

おくつきといへる有、こは昔いともかし

こき大内につかへし人と聞つる

に、世をそむきて後此野邊の露と

しも消つるにやいと哀になむ

古しへの其糸竹のしらへまで

思ひあはせて過るさか野路

此處より右にをれ、小倉山におもむ

きて麓の茶亭にしはしいこひて

あふきみるに、山は皆楓の木どもいと

おほし、今弥生の半なれハやうく

春めるもいとゆかしく、おのつから秋おも

ほゆる斗になむ、いさ山へのほりて

みむといふほとに、此茶亭のあるしにや

いとむくつけき婆々出来りて、山へ登り

給は、右の方にハ法然上人のおくつき

あり、左のかたにハ其かみ定家郷の百人

一首撰はせ給ひし時雨の亭といへる有

かならず行て見捨へなと、ほこらしけな

るおも、ちにてをしふるもいとにくからず

やかてかたはらなるわらはしてあないさせ

けれハをしへのまゝに登る、いとけはし

き道をからうして山の頂に至るに

けに時雨の亭の名残にやとおもふ斗

かたはかりなる亭の残れるもいとゆかしく

おほえける、彼あないせしわらはに物とら

せて爰よりかへし、猶いこふほと目も

はるけき山々、画に書たらむかことく

えもいはぬけしきに、またなき心ちぞせられける

をくら山思ひ入てそ中々に

みね古しへの思はれにける

夫よりもとの坂路をくたりて麓に至る

左のかた野中ニ為家郷のおくつき有

すこし引入たる處に厭離庵と

いへるありて、其中に定家郷のおく

つき有とをしふるにまかせおとなひけ

るに、内より尼立出て案内す、入て

みれはいとふりたるおくつき也、かたへに

御の水と名つけし井戸有、めくり

草いたくしけりたるいとあはれにて

幾とせをふるゐの水も青柳の

名にしおへはる緑にそみゆ

庵にしはしいこふほと、彼尼いとねもころに

もてあつかひ、何くれと物かたらふなへに

抑定家卿は貞永元年十一月出家

し給ひ、法名明静と申奉る、御歌に

露霜のをくらの山に家ゐして

ほさても袖の朽ちぬへき哉

十とせあまり爰に閑居ましくて

忍はれむ物とはなしに小倉山

軒はの松のなれて久しき

其比昔今の歌を撰はせ給ひ、みつから

書集障子に押せおき給ひしを小倉

山荘色紙の和歌といふ、則百人一首

是也、御齡八十歳にして仁治二年八月

廿日にかくれさせ給ふ、其後また為

家卿も爰にすませ給ふ、御歌に

住そめし跡なかりせはをくら山

いつこに老の身をかくさまし

此御歌を色紙にかゝせ給ふとき柳の井

の水にて御筆染させ給ひしとぞ、彼

卿の此名をことに愛させ給ひて

小倉山陰の庵はむすへとも

せく谷水のすまれやはする

と詠し給ひぬ、いつしか両卿のしるしの

石も苔にうつもれ、軒はの松もおひ

かはり、庵の名のみ残りしか、元文のころ

冷泉家の御いとなみありしより、いまは

こみちをなす所となれり、かくいちしるき

跡とはいへと、五百とせあまりの星霜を

経ぬれは、纔に残れる礎をもとめ、麓の

野邊の草をかりふき、此庵をむすふ

折ふし、南都圓照寺の宮より其かみ

為家卿の念し給ひしと、世に言

もて傳へし圓通のみ佛を寄附し

給はりけるを、かしこくも爰にすゑ

奉り、古き跡とふしるへとも、かつハ後のわさ

する露の身のおき處とはなしぬ、さハれ

年月立ての後は、此ことわりをうしなは

むいともかひなき業也、かし

こは彼尼の物かたりしまゝをしるす

扱爰を立出、清涼寺へまうす、此御佛

は此ころ、難波なる一心寺にて御帳

ひらきてをかまれ給ふ

いかならむ罪もけぬへしおのつから

清く涼しき法のをしへに

こゝにもふりたるおくつきあまた有け

れは、何人のしるしやらんといとゆかしきこゝちせられて

何となく行過かてにおもふかな

ふりにし人の引もとめねと

こゝより向ひなるほそき道の左右より竹生たる處を三四丁行に、野の宮とていとふりたる宮あり、小柴垣結めくらし黒木の鳥居のさまいと物さひたり

年ふりし宮居なからの小柴垣

しはく人のとふかゝしこさ

夫よりしはし都に足をとめ遠こち見めくるほと、けに名におへる花の数々いひしらぬ筆もて尽すへきにあらねハ只おほよそしるすのみ

梅の宮にまうてしに御社のほとり

梅いとおほかれと、弥生半も過たれば只青葉のみ繁れとも、何とやらむ匂ふはかりのこゝちになむ

神垣に匂ひし花の名残とて

青葉の梅のなつかしき哉

こゝより松尾にまからんとて梅津河てふ渡しをわたらむとするほと、かたへの森の中にて鶯の鳴ければ

花に咲名をなつかしみ鶯ハ

梅津かはらに木津を鳴也

桂河をかたへにみて松の尾に至る、いとふりたるみやしろたふとさ言へくも

あらず

世々経ても神の恵そいやたかき

松の尾山の松のみとりは

とかくするほと空くもりけれハ、いさやりへとてあへきくくるほと小雨障出たり、爰はうつまさてふ里と聞て

あかつきし旅の衣をうつまさの

さとふりかゝるけふのむら雨こゝにしはしいこひ、駕籠をやとひてやとりへ帰りぬ、

またの日は藤の杜のみやしろハ稻荷の御やしるにまうて、

神の世にうゑけむ藤の花ハ猶

なかくさかえむためしとぞみるあふけ猶かさしの松のなをしけみ

いやさかえます神のみやしろ

ちかきあたりの花みむとて清水寺にまうて、いとたふときみ佛を拝し奉りて

おのつから人の心も清水の

清き道にとおもひ入かな

音にのみ聞し音羽のまし水に

ちかひを結ふ今日を嬉しき

音羽の瀧のほとり二桜のいとおほかりければ

あや錦おるかとぞみるしら糸の

瀧に移ろふ花さくら花

双林寺といへるは其昔、西行上人爰に

住給へるよし、いとふりたる桜を今も西行

さくらと世に言あへるもあはれに

ゆかしくおほえければ

古しへの人の心をたねとして

今も匂へるさくらはなかも

頓阿法師の跡とめてみぬ世の春と

よみしも爰也と聞て

跡とめて住けむ人の心まで

猶しのはるゝ花の陰かな

知恩院の桜いとおほかりけるに

目もあやに咲る桜の花は只

雲歟匂へる雪かかをれる

雲林院てふ御寺は昔はいと廣々して花もおほかりけるか、今は纔に残れりと聞もいと哀にて

今も猶其おも影はしら雲の

林にまかふ花さかりかな

紫野の大徳寺はいとふりたる御寺也、爰二其昔茶に名高かりし利休の人かたありければ

紫の色も其名もあせすして

今もゆかりを残す大寺

加茂のみやしろへまうてしに、ふりたるさまいとたふとし、かたへの流れいと清らかなりければ

今も猶神代のまゝの流れかも

河せの水のさも清くして

たゝすの杜といへるは、下加茂のかたつかたなり

神垣に懸しちかひの数々を

たゝすの杜のたゝに過めや

平野の御社は桜いとおほかれと、遠こちのうたひめなとつとひて、中々に花のなかめけおされたるもいと口をし

神垣の桜はさらによそほへる

里のをとめの花やかにして

北野の御社にまうてけるに、こは

我ふる郷なる亀井戸の御神と同じ  
けれハ、わきてたふとき心ちせられて

宮はしらたてし心の直からは

いかてしるしをあま満の神

小室の桜は根本より花咲たり、爰は

山風いとおよくしてかく枝の横たはれ  
るとなむ、くねりたるさまいとをかし、其

数もまたおほければかなたこなた見め  
くるに、只花と共にあゆむかと

おもふ斗なれは

物いへは物いふかことゑめはまた

恵むかとみゆる花さくら哉

夫より日にくをちこちとみめくるほと

いつくも目おとろく斗花ならぬハあら

されと、かくつたなき心には只おもふのみ

せんすへしらす、あはれ東なる師ノ君

にとおもひ出ぬ日もなかりける、今は

都も大かた見をへつるに、いさや爰より

ほとちかき彼石山にまうて、名た、

る八ツのなかめの其ひとつをたにたとり

て、ふる郷のつとにせはやと思ひ立ぬ、

彼御山は都より道のほと五里に餘れり

とぞ、卯月朔日といへるに朝またき

都を立出しに、白河てふ橋のほとり

にて夜はやうく明はてたり、粟田くち

日の岡なとうちこえ行、左右山々に

つ、しいとうるはしく咲みたれたる、かたへに

めなれぬ草の花色をあらそひ、都に咲

ましりたるあはれにもいとをかし、山科

てふ處に至れば、道もなたらかにして家あ

もまたすくなからず、かたへの石の道しるへニ

花山小野寺など彫たるいとゆかし、めてに

諸羽の社と書る額うちたるふるき石の鳥居

立たるは、何てふ御神にやいとたふとくおほ

ゆれば、まうてまほしと思ふ物から、爰より

道いとはるけしと聞て、本意なくもぬか

つきまつりて打過ぬ、猶行々て追分てふ

駅に至る、是なむ京と伏見の別にして

道しるへの石たてり、此石のうしろの

方に柳は緑花は紅の文字彫たるハ

故有さまにおほえてゆかし、爰に

大きな茶亭有、走井とて庭の入口

なる井の水絶すたふくと流れ出るいと

清ら也、のほりくたる旅人おほく爰ニ

いこへり、此あたり大津画はた物ひさく家多し

古しへの人の心を移し画に

今も残せる世々の家つと

左の方にいと、高き石階、有上なる

さ、やかなるみやしろは関明神とて蟬丸と

いへりし人をいはひまつるとぞ、おなし

さまなる御宮少し隔てみつ並たてては

いかなる故にやあるらむ、心ある人にとはまく

おもへと、此あたりにつとへるはゐなかく

たる人のみにて、何とふへくもあらぬそいと

口をしき、猶行々てめての方なるほそき

野道をたとるに、是なむ小関越

とて古しへの関の名残とぞ、今はさる

へき家居もなくはにふの小家處々に

たてるもいとあはれにして

守人も今は中々花鳥の

色ねにまかす逢坂の関

此うへなる御山は三井寺とて、西の国々

に敬まへられ給ふみ佛のた、せ給へ

れは、いとたふとくそおもほゆる、麓にハ

茶亭おほく立つらねていと賑はへり、高く

作りなしたる石階を登りて少しなたら

かなる處に天てらす御神の神社

あり、其かたつ方にふりたる井ありて

何とやらむゆかしけにみゆるに、かたへに

ある人此井は其昔帝の御うふ湯

あみさせ給へりし水也、よて爰は三井に

あらず御井寺なりと語しは誠にや、

おなしさまなる石階また登れハ向ひに

圓通菩薩のた、せ給へる御堂有、かたへなる

さ、やかなる御堂には秩父西国坂東の

み佛た、せ給へる、そか中に我ふる郷なる

保艸寺としるし有しはわきてたふ

とくおほえつ、またさらに東のそら

なつかしう成ぬ、右の方には名におへる

湖はるかにみわたされ、水の面は只

藍をうち流したるにことならず、遠

こちにた、よふ舟はさなから木の葉

の散てうかふかとみゆ、爰に大きな遠目

かねてふ物懸あるをのそきみれば、唐崎の松

堅田の御堂などさしもはるかにみゆるは

画に書たらんより猶かすか也ことわりや

爰より唐崎へは道のほと三里隔、堅田

へは五里も有とかや、さもあるへきことに

こそ、爰よりすこし左の方に垣結まはし

猶行へき道有、此奥に昔龍の宮古

よりあかりしと聞鐘のをさまれるなるか  
爰は女人をゆるし給はねは入こと叶かた  
しと聞は、只うちあふくのみせんすへ無  
し、はした、すみてよく／＼思ひめくらすに  
遠き東に生れことにをみな的身

としてかゝる御山にまうつるすら  
わたつ海のふかき故あることにこそ、世に  
も稀なるさちとやいふへき、か斗の事  
嘆くへきやはと心にいさめ思ひかへし  
て過ぬるも、いと本意なき業そかし

罪深き身のかひなくも音にのみ

聞て過ぬる三井寺の鐘

しはし拝して御山をおり、たとり／＼て  
大津の駅に至る、左のかたハ湖にそひ、  
右の方ハ家居立つらなりていと賑はへり、町  
のなから斗に義仲寺といへるあり  
こは木曾よし仲ぬしのおくつき也と  
聞もいと哀にこそ

みなもとはおなし流れと傳へ聞

いさをも今はあはつの露

膳所の町を過るに、明日なむ此處に  
鎮ります御神の御祭とて人つとひ  
山鉦てふ物引もてあるきいと賑はへり、御  
城の前を過て栗津の原にいたれば、  
木曾のみうち人今井何かしのおくつき  
處と彫たるしるへに石立るもいと哀也  
左の方はるかに三上山鏡山など

みゆるに、古しへ人の言のはを今まの  
あたりむへとこそ思ひ出ぬれ、猶行々て  
東へのうまやちと石山へのわかれ道あり

右の方石山へとておもむくに左の方ハ  
湖也、御山まで道のほと十あまり八町  
有とかや、なから斗にさゝやかなる石の橋  
かゝれり、是を夢の浮はしといへるとなむ  
御山のふもとにハ旅亭軒をつらねて

たてる中に、松屋といへるはことに目とまる  
家のさまなれば爰にいこふほと、處に  
名たる瀬田蛤若鮎など調して出せる

いとめつらか也、しはし有て御山へまう  
てしに、けにや名高き石山の御堂ハ

山より山にそひて作りまうけたれはいと  
高く、御堂の下なる立横の柱の数はいく

はく歟あらむ、いとしけくうちなしたり  
御堂へ登りてみれば麓にてはいと、高しと

おもへる木とも、只目の下に成ぬ御堂の前も  
いと廣くして、またたふとさも聞しに

まさりておほえければ、あまた、ひぬかつき  
奉りぬ、はたみ佛のおましより左の方なる

源氏の間といへるは、彼式部のおもとの世に  
名高き物語作らせ給へる、處成とぞ、爰

を守る僧にあないをこひて内に

入に、彼式部のおもとの手ならし給へる  
硯、はたみつから書て納給へりし大般若

経など五卷六巻ととり出てみせ、爰に

こもらせ給へりしこと何くれとこうせしめるは  
けに人の世の事とはさらにおもほえ

す、此源氏の間といへるはさまで廣から  
ねと、式部のおもとのみこゝろは爰よりみゆる

湖すらいとせまし、いとほしとや見給ひ  
けむ、はた遠こちの山々をも高しとたに

おほさ、らましなとおろかなる心に

おもふもいとかなしや、こゝを立出、左の方へ

行は蓮花石とていと大さやかなる石立り、

そも此御山を石山と唱ふるも此石ゆゑ

成とかや、其色紫にしてさなから蓮花の

さまなしたり、其ひま／＼に名もしらぬ

艸なと生出たるえもいはす、けに世に

二なき物とは是ならむかし、いかなる画工

も移しえむ事いとかたかるへしとそ思は

れぬる、爰よりまた一きは高き山に

登れば、月見亭と書し額うちたる處

有、こゝより瀬田の橋はるかにみえ

遠こちの目もおよはぬ山々湖にそひて

みわたさるゝなど、猶見處もおほかれと

心なき身ハ只いたつらに口こもるのみ

すこしおくまりたる處に彼式部のおく

つき有、すへて此あたりは、いにしへの

かしこき人々作りおかせ給ふ道の記など

いへる文あまた有て、世にしるる處なる

を、山の井の底もくみ、ぬ心もて何事をか

立出へき、中々に人わらへなる業に

こそとてやみぬ、猶をちこち見めぐり、やかて御

山をおり松屋かもとにやとりぬ、あはれ

秋の月の比ならむにハとおもへと、空

いとくらくして只はるけき山々ほのかに

みえ、湖の音おとろ／＼しく聞ゆるのみ

しく聞ゆるのみいと口をし

山の端に月もやさすと夜もすから

心にかゝる志賀のうら浪  
明れハこゝを立出て、きのふのまゝ、の道を

たとひ都のやとりに帰りぬ

都にあまた日をかさねつれば、今は  
難波へ帰らむとて其まうけをなし、卯月  
中の二日に都を立出ける

やつれても都の花になれ衣

た、まくをしき旅の宿かな

大佛殿より東福寺なとまうてつ、

おほかめ谷といへる處を過に、爰は

左右梅おほく並たてり、今卯月の半なれ

青々とひろこりたる葉のひま／＼になれる

実のみゆるもいとをかしとおもふ物から、此梅

花咲たらむ比はいかにといとゆかし

くそおもはるゝ、かくて行ほとあやしの小

家だにあらて、人はなれいと物すこき

所に至るに、かなたこなたの木くれにをり／＼

鶯の鳴ければ

行さきも猶しるへせようくひすの

聲より外はしらぬ旅路を

なと思ひて、行ほとにはやくも宇治の

里に至ぬ、爰は家ゐもおほくいと賑はし

はた家々に茶園つくりてめのわらは

うちつとひ茶つめるさまいとめつらか也

何やら舞柏子とりて歌うたふ聲またをかし

世にかをる木のもと聞は里人に

まちりて我もつまむと思ふ

右の方すこし引入たる處に東屋の

観音とて石のみ佛た、せ給ふ、夫よりまた

行て宇治橋のもとに至る、爰二通圓てふ

茶亭ありしはしいこひて、かたはらなるいと

きらやかに作りまうけし酒樓に入て

昼の物なと出させぬ、爰よりめてにつゝきて

黄檗山萬福寺てふいと大きな御寺有

こゝにまうつるに其廣やかなることまた

たとむ方なし、猶爰より河にそひて

朝日山恵心院興聖寺なといへる御寺二

まうつるに、こゝより向ひなると高き山

は喜撰か嶽とかや、弓手につゝきし山を

早蕨の杜椎か本の社とよへるとなむ、

はるかにぬかつきつゝめてなるかなかたを

返りみれば、螢見の亭と書たる額うちて

いとみやひたる楼あり、五月の比京難波より

宇治の螢狩とてまらうとこゝにつとへると

なむ、(この間四行抹消)

宇治橋を向ひへ

渡らむとてかなたこなた返りみるに、げに

宇治川の流れいとけはしくもまた清け也、

柴つむ舟の遠こちに行かふに

棹とる人の物おもひなげにみゆる

なといとをかし

ことゝはむ柴つむ舟のふな人は

うき事しらて世をや渡ると

橋の向ひ右の方に橋姫の社とていと

さゝやかなるみやしろ有、しはしぬかつき奉て

めての方河にそひて壺町あまり行は、

平等院とていとふりたる御寺有、諸堂ハ

大かた絶はてゝ、かた斗なるにおくまりたる

處に釣殿めきていたくあれたる御

堂のみ残れり、其かたはらに 扇の芝といへ

るあり、こは昔源三位頼政卿、爰にて

うせ給へりし處よと聞もいとあはれに

おほえて、みぬ古しへのごとしあれとすゝろ

流落る斗になむ、此君は和歌に

こよなうひいて給へると聞て

道芝の露と消てもみかきおく

言葉を玉と誰かあふかぬ

爰よりまた宇治橋のもとに至りしを

そかひに猶行に、いといかめしう作り

なしたる家居あり、こはおほやけよりおきて

させ給ふ御茶處となむ、夫より新田と

いへる所に至れば、茶ひさく家おほく

並たてり、此あたりのめての方にいとほそき

流れ有てかきつはたうるはしう咲たり

壺里あまり行て、長池てふすくのなから

なる松屋といへる家にやとりぬ

十三日またきに爰を立出、一里あまり

行て玉水てふ里に至る、此處よりめての

方なる山一里あまり奥まりし處に

井出の玉河の名残ありとぞ

玉水の里とし聞は名におへる

井出の流れとくみてしる哉

右の方なる畑中にいとさゝやかなる井有

こは玉のゐとて昔より名におへる井成とぞ

道のへに今も残りて旅人の

玉とくみゝる玉のゐの水

夫よりしはし行て、木津河てふ舟渡し有

此川古しへは泉河といへりしとぞ、河より

こなたハいと廣き堤に、してみかの原こまの

里なと打過行に、向ひはるかに加勢山

みゆ、いにしへ人の衣かせ山とよませ給ひしハ

此あたりにや、其言の葉に似もやらて、きのふ

今日はいけいとよく、また深からぬ夏の日に  
ひとへの衣すら暑さとほりていと絶かたく  
さと吹河風にいさゝかいきいて、渡しに  
至る、是より奈良までの道の行手左右  
いとなたらかなる山々につゝ、し色よく  
咲みたれ、あやしの賤か軒はに

紫の色ふかくかゝれるは藤の猶咲残れると  
みれば、さにあらてあふちのいみしう咲たる  
なといとをかし、猶行て奈ら坂てふ處に  
いたる、さまでさかしらぬ坂路に登るに  
般若寺てふ御寺有、爰へまうて夫より佐保寺  
薬師寺へまうて法花寺に至る、爰に  
横笛姫の人かたあり、此横ふえてふ人は  
大内につかへまつりて、瀧口の何かしと  
ひそかに過せし事あらはれしより、頭を  
そりて爰に住しとそ、此人かたハをりく  
かきかはせしふみもて張たるよしいとふり  
たり、爰を立出て佐保河をうち渡り、  
行々て大佛前なるいとくゐてふ家にいこふ

打わたすさほの河原の川風の

吹来るほとは夏としもなし

しはしいこひて大佛殿にまうつ、此み佛  
の大きやかなる、いかなるますらをにても始て  
拝せはあなやと言つへし、ましてかひ  
無をみなわらはへなんとは只きもつぶる、  
斗になむ、爰より山つゝき東大寺に  
まうつ、おく霜の花いつくしみとやらむ  
世に聞えし鐘は、此御寺のおくまりし  
いと高き處に有、爰を出て向ひなる  
春日の御社にまうつ、そも此みやしろの

廣やかさはた物さひたるいとたふとさまた  
たとしへなし、左右に並立る石燈籠  
其数いくはくかあらむ目もおよはぬまで多  
かり、はた年ふりし松柏の生しける  
さまいとすさまし、うしろのかたに杉おほく  
生たるは三笠山といへりとそ

三笠山さしていそかぬ旅ならは  
道の隈々尋みましを

御社を拝し奉りて

みやしろに繁れる杉のすきかてに

返りみせらるあけの玉かき

三笠山につゝきてめてなる山は手向山  
とよへるとそ、昔菅公紅葉の錦とよませ給  
へりし時、御こし懸させ給へる石なりとて、  
さゝやかなる石にしめはへてあり

若楓しける緑の春にきて

ぬさと手向む神のいかきに

二月堂はいとたふとき圓通菩薩たゝせ給へり  
おましの下なる石階のもとに若狭井  
といへるあり、爰は常には水かれてなし

二月中のふつかに若狭の國より水来り  
其夜の中に若狭に帰るとそ、こは

いと深き故よし有事となむ

御佛の恵もふかき若狭ゐに

なかれ絶せぬ法の玉水

若艸山といへるはいとなたらかにして艸  
生たり、いたゝきに松三もとたてり、此あた  
り鹿おほくむれゐて旅人に食を  
こふことさもなれたり、夫より興福寺に  
まうつ、爰に南圓堂とて西國八番

にあたらせ給ふ圓通菩薩の御堂有、いと  
たふとく拝し奉る、かたへにさゝやかなる  
藤棚あり、こは八ツのなかめの其ひとつとかや  
爰を立出、猿澤の池のほとりにいたる二

うねめの宮とていとさゝやかなるみやしろ有  
昔大内に仕へまつりしうねめなる人

こゝに身をなけしよし、かたへに衣

懸の柳といへるあり、彼うねめ此柳へ衣を

懸おきしとそ、はた上なる堤には八重桜  
てふさくらあれと、こは誠の八重桜ならす

興福寺の僧玄宗といへりし人愛

せしにて楊貴妃さくらと名つくとそ  
さるをいつの比よりか八重桜と世に言  
あやまれるとなむ

猿澤の池の心に澄えつゝ、

あそへる魚の安らかにみゆ

青柳のいともかひなし宮姫の

もすそをいかて引もとゝめぬ

元興寺児の観音など猶かなたこなた

まうて、夕つかたいとゝ井へ歸りてやとりぬ

十四日またきに爰を立出て招提寺に

まうつ、いと廣やかにしてふりたるさまたふ  
とさたとへむかたなし、夫より伏見の

野邊を過て菅原の里なる天満御神

にまうつ、御社はさゝやかなれとふりたる

さまいとたふとし

みつかきにかゝるしめ縄打はへて

祈るこゝろもすか原の神

西大寺にまうつるに爰もいと廣

やかにしてふりたり



行に、河のほとり楓いとおほくして  
青みわたれるいとをかし

こむ秋のおも影うかふ龍田河

緑をくゝる瀬々のさゝ波

夫より十三嶺といへる山に登り行に、

いとさかしき道なれとかなたこなたに  
つゝしの色よく咲くるは、山のすかたに似も

やられていとうるはし、いたゝきに登れは

さゝやかなる茶亭ありしはしいこふほとにかゝる深山のならひとしていと晴やか

なる空俄にかきくもり、遠こちの山々より

雲むらかりていたうくらかりしに

時鳥しはく鳴て過るは、今休らふ山の下

にやあるらむ、いとちかゝり

五百重山かさなる雲の彼方此方

なのりかはせるほとゝきすかな

をち返り啼音ひまなきほとゝきす

分入山のかひとこそきけ

すこしおりむとする頃、一きは高き山の

なから斗にいと大きな岩有、其色

紫にしていとうるはしきに、處くに

つゝしの咲たるは画に書たらむより

うるはしかりぬへし、此岩は業平衣

懸の岩といへりとぞ、此山は昔業平卿

奈良の京より河内の高安てふさとへ

かよはせ給ひし道なるにて此岩

有とかや、かゝるけはしき山をはいかに

して通はせ給ひけむ、はた此高き岩の

うへになとて御衣を懸給ひけむ

昔の人はいかなる術の有てかゝるふしき

を残し給ひけむなとおろかなる心にハ

いといふかしとおもへど、心ある人々はいかに

をかしと見給ふらむなと思ふく打過ぬ

此山向ひへ下りつれハ河内の若江てふ里

なり、爰なる野中壺町斗右の方に

木村何かしのおくつき有、すこし隔て

山口何かしのおくつき有、こは世に其名

聞えし人々なるにかゝる野中にしるしを

残せるはいとあはれにおほえてすゝろに

桂をうるほし、しはしぬかつきて打過ぬ

爰より三町あまりも行に河内摂津の

境の小河、あり是より深江てふ里にて昔の

名處とて、此あたりの田は菅のみ作りて

あり、夫より右にそひ行は玉造口と

いへる處に至る、是なむ難波の入口に

して茶亭おほく並たてり、爰にしはし

いこひ、谷町すちより濃人橋すち松屋町を

たとりくで、夕つかた我住家に帰りつきぬ

旅路の花  
終

[illegible]

蘆の葉風

おし照難波の里に十とせはかりの  
春秋をおくりつれば、くれ竹のよの  
うきふしも数かりつれと、さわらひのをり  
くゝに行てみし名處もまたすく  
なからぬを、思ひ出るまにくゝあやむしろ  
あやなき筆に書しるしぬ  
難波の里にめつらかなるハ琵琶法  
師女商人、をみな錦頭布かつき  
たる、處々の夜みせのきはひ、月毎の  
大師めくり、宮芝居の上り囀太夫ふし  
新町の赤前たれ、難波新地のをりくゝ  
の作り物、睦月二日の朝またき水菜  
うる聲いとをかし  
此日、鯨と水菜をあつものにして食  
すれば年中の邪をはらふといひなら  
はせり、さなからにけふ水菜うる  
事いとおひた、し  
一とせ睦月廿日に西の宮の御神に  
まうてぬ、御もん前なる濱より舟に  
打乗て出るに、まだ河風はいと寒け  
れと、水の面はおのつから清けに  
すみわたれるもいとのとけし、岸の柳の  
やうく萌出るもいとをかし、河口に至れは  
はるかに海の面みわたさるに  
かなたこなたにいかりおろせる大  
ふねの、霜のひまにみゆるなとえも  
いひかたし、はた物ひさく舟おほく

こき行に、たそかれ過れば此わたり  
に舟にてつとふうかれめも有とかや  
けに流れの身とは是をやいふら  
む、いとあはれにこそ

みたれ髪けつるをくしのはつかなる  
流れわたりに世をやおくれる  
此あたりに、かた葉の蘆とてさるやかなる  
蘆の片方にのみ葉生たる有とぞ、昔ハ  
此あたり蘆のみ生たる處成と聞に枯立、  
あしかなたこなたに残れる、いと  
あはれにて

難波江の片葉の蘆のかたはかり  
昔のことのおも影にみゆ

難波より舟路三里、尼ヶ崎遠州の殿の  
御城前にて舟よりおりてしはしいこひ  
尼か崎なる町を過て野道に出、人々  
舟の中にて物しつるかこゝちにて酔出て  
おのかしじうちたはむれつ、二里餘  
の道をはやくも西の宮の町に至る、家の  
作りさま人のさまもいと鄙めけと、其  
にきはしはけに御神の御威徳  
いみしうこそたふとけれ、三四町斗行て  
御社の前なる町中に大きな鳥居  
あり、御門を入に道いと廣くはた年  
ふる木共あまた陰くらきまでうゑ並た  
り、御神のおましハさまで広からねと  
其作りさまは他に異にしてたふ  
とさたとしへなし、しはし拝みてかなた  
こなたみもて行に、いとふりたる御池に  
亀ともおほくすみあて、おのつからこゝろ

のとかにみゆるもをかし、かたへに  
かゝれる土橋をわたれば、さゝやかなる御やしろ  
あり、いとふりたればさたかならねと弁才天  
にやおはしますらん、左の方にをれて  
馬場ともいふへきいと長き處には木共  
おほく並たてり、猶かなたこなたをかみめ  
くりてもとの御門に出、前なる町のなから  
なる加納屋てふ家にいこひ昼の物なと  
出させぬ、爰は名におへる濱なれ  
は魚いとあさけしくはし有て  
御前の濱見にとて立出、三四町斗

もあるへくいと賑はへり、また酒つくる家  
おほく立並たる、いと大きやかなり濱邊に  
至れば、はるかなる海の面只一目に見  
わたされ、其廣やかさまたたとへん方な  
し、猶遠くみわたせば空も海もひ  
とつにみゆる物から、かなたこなた  
にうこめくは釣するふねにや  
あらむいとをかし、左右にはいと  
さゝやかなる家ゐ處々にたてるハ  
蟹の住家にや、またかたへにはいと、高  
く網なとほしたるもいとめつらか也、右  
の方にそひ行は、海の面にさし出  
たる筑塙あり、爰へ渡らんとて小舟に  
乗て行に、此塙の岸に目馴ぬ  
海草あまた生たる中にちひなき  
蛎貝おほくつきたるを、あないする男  
小刀にて取打、くたきうしほにて  
さらくゝとぞ、きたるを、いさまあり給へと  
さし出すに、いとめつらかなれば手

にうけてたうへぬるに、其  
味はひたとふる物なくさらにあくこと  
なし、かく海の中なから海の物をくふ  
もまたをかし

樂しさのたくひ渚におり立て

家つとにせむ磯業演貝

やかて筑しまに登りてみれば、其はゞいと  
廣くはた長く海中にさし出たり、

そこひなき海の面は只藍を打流せる  
如くみゆれと、浪の高くうち上たるは  
雲とあやまたるゝまていとしろし、

筑寫ちかく打よするしら浪は、今もや爰  
にうちあけん心さしてさもすさま

しきに、岩うつ音のとゝろくくと  
耳をつらぬく斗におほえて、長ゐ  
ハえたへぬこゝちせられぬ

四方の海開はしめし昔より

かけて幾世そ浪の白ゆふ

蟹小舟さして行へもしら浪の

霞て遠き沖つ海はら

此筑しまはちかきころことなれりとそ  
抑爰は海いと廣やかにして風あらく  
波高き折は行かふ舟の愁大かた

ならず、されは七十年あまりの昔より

おほやけに聞え上奉り寫つか

むとすれとも、浪風あらくしてやゝつみ  
あけし岩とも打なかさるゝことあま

たゝひにしてことならさりしに、我仕へ  
ます君難波の司に備り給ひし

比、またおもひおこしてねき聞え奉り

しに、さしもあらゝかなる波風に  
打流されし石も土も、今此君の補  
佐し給ふ御代にあたりていさゝ

かの愁なく、おもふかまゝにこと成ぬと

かや、されは爰を過る舟のさはりなく

此濱の賑はひ大方ならぬもとし

へに、御いさを残し給ふ御徳いみ

しうかしこみ奉り、里人ハ藤の御神

とあふきまつりてさゝやかなる御やしろ

をたてゝたふとみあへるもむへ成哉

よる波の音に聞たにかしこきを

あふかさらめや里の蟹人

猶をちこち見めぐりてもとの酒樓に立

帰、やかて爰を立出て、尼か崎に来る

ころは申の半も過たり、爰に人おほく

むれゐていとかしましきを何事にや

ととふに、夕網の魚市成とぞ、こな

たの岸に魚舟おほく着たるを

のそきみれば鯛はも鰈など其数不知

目覚しきまておほかり、いとめつらか

なれはかなたこなたの舟もみて行き、扱

歸りてもとのふねにうち乗り、そや過る

比難波に歸りぬ

睦月中のよか子過る比より、處々に

鎮ます御神の御社いと賑はへり、こは

其町々氏神とあふき奉る御神ニまう

てゝ、みあかしの火を火繩に移し

暁比に歸りて其家／＼の御神に

みあかしさゝけて後、今日の節會の粥

焚そむるとぞ、東にてかゝること聞も

ならはねは、めつらかにおほえてをかし  
きさらき始の午の日に御城前なる

馬場といへる處に、人のつとへること

おひたゝし、こはいとゝ廣き芝原に

てぬひるよめななといとおほかれは

ひねもす指もてあそふ也、はたをの

わらはは爰につとひていかのほりもて

あそふ、東にかはり初春のころハさるわさ

えせてけふなむこゝにあくるをもて

ならはしとせり、すへて此あたり春の

賑はひたとへんかたなし

難波の町に常にはやらせ給ふハ天満

御神也、御社のめくり梅いとおほかれハ

きさらきの比、爰にまうつる人絶

間なし

さかりとはとねとしるし諸人の

梅かかならぬ袖のなければ

御社のうしろ奥まれる處に宇賀の

御神のみやしる有、御前にいと

ふりたる池有て、めくり梅いとおほし

咲梅の香にや浸ると立よりて

結ひてそみる春の池水

池のめくり大きな藤棚あり

花のさかりはことに賑はし

おのつから年ふる池も春くれは

若むら咲に匂ふ藤浪

高津の御社も梅いとおほし、はた昔

の名残とてさゝやかなる高臺残れるも

いとゆかし

難波津の昔をかけて思へとや

いかきの梅の咲匂ふらむ

きさらきの末のふつか、天王寺の舞樂こそ  
昔おほえていとたふとけれ、此舞樂  
てふことは大方ならぬ存よし有ることと  
なむ、物よくわきまへぬ心には今日  
爰につとへる人をすさましと  
おもふのみ、只たふとさとかしこさに  
いふへき事もあらずかし、はた亀井  
の水のいと清きに、おのつから心も  
すめる斗になむ

あなたふと心の塵も餘波なく

そゝきて行む法のまし水

幾度歟結ふ亀井のまし水を

深きちきりと思ふへきかは

弥生のひるなまつりハ東とは様かはれり、  
紫宸殿のさまさゝやかなれと、おのつから  
大内のみありさまかくやおほえていと  
かしこし、はた紙もてつくれる左右の  
桜立花も匂ふ斗の心になむ

かくなから幾世さくらしも立花も

心のとかにみるかかしこさ

弥生はしめつかた、住よしの汐干いと賑  
はし、堺すちより長町を過れば左右  
いと廣やかなる野道にして、右の方はる  
かに紀伊国に名高き山々みゆ  
左のかたには清水の御山はた、浮瀬  
の酒樓なとみゆ、猶行は天下茶屋と  
いへるあり、爰も打過行に御社にちかき  
あたりには茶亭はた酒樓もおほかり、  
中にも伊丹屋三文字屋いと賑

はへり、反橋の向ひはいとさ、やかなる松並  
たり、其ひま／＼に桜の咲たるは波  
こえたらんかとうたかはる

郷の御社いとたふとし、御社の右の方  
に御田有、五月末の八日ハ御田祭  
いと賑はし、爰より左の方式町餘り行て  
浅澤をのの名残有、杜若いとおほし

浅からぬ色にそ匂ふかきつはた

あさしはをのゝの水にさけとも

爰より壺町餘り右なる小橋をわたりて  
左の方なる難波屋てふ茶亭の庭に  
いとふりたる大木の松あり、此あたりは  
遠里小野とよへるとそ

住よしの遠里をのゝ遠けれと

松は難波の名に聞えけり

扱濱のかたに至らむと右の方なる松の  
並たるいと廣き處を過、高燈籠のもとに  
至る、こはかゝる浦々にたつる物也とそ、  
其さまなからまて石もてたゝみ上は目も  
およはぬまていとと高かり、向ひなる堤に  
登れば海の面只一目にみわたされす々  
たるひま／＼に高く打あけたる浪は  
さなから雲と散玉とくたくるなとえも  
いひかたきに、向ひはるかに淡路しま  
みゆるもまたたとへん方なし

住よしと名にしおへれば浦波の

立帰るへき心ちこそせね

わすれ草生とし聞はすみよしの

浦山しくもななめつる哉

おりたちてあさりてをみむわすれ貝

しはし東のかたやわすると

一とせ弥生半ばかり、河内の國なる葛井  
寺より處々にまうてんとて朝またき  
難波を立出けるに、天王寺村にて

夜はやう／＼明はてぬ、爰に茶亭めく  
處みゆれとまた人有としもみえねは  
其うちとう出て、しはしいこひ行て  
平野の大念佛てふ御寺にまうつ

僧おほく立並て朝のつとめ聲澄て

いとたふとし、御門の前なる茶亭に  
いこふほと、今はしめておき出たるにやあらん、  
めのわらは目をすり帯もゆひあへす茶な  
と出さまいとをかし、平野のまちを

過れば摂津河内の境川あり、小橋を  
わたり行て大和河に至る、なかれいと  
清くかなたこなたに生る水艸の緑は  
水にもまして清らか也、板はしを  
渡れば堤に草おほく生たる中に

引捨たる牛みつよつおのかまゝに

あゆみめぐりて草はむなと画にもかゝま

ほしけ也、左にそひゆけは小山てふ

村里に出、此里より團扇おほく作り

出して京難波にてもてはやせり、爰を過

右にをれ行はしはし町つゝきて賑はし

こゝを過、野を過て御寺のもとに至る

かたへの北門より入に右の方に藤棚

あり、下に石もて作れるいと大きな井有、

藤の花やう／＼咲出たるも御寺のみ名

おほえていとたふとし

紫の雲歟あらぬ歟藤のはな

はひもてかゝる法の道芝

御堂もいと廣やかなり、西國五番にあたらせ給ふ、圓通菩薩いとたふとく拝し奉ぬ御堂のうしろなる御園に紫雲石の

燈籠あり、其色いとうるはし、こはいつのみ代にか帝の納め給へりしとぞ、前なる御門を出れば旅舎おほく立並ていと

賑はし、爰にいこひて左のかたなる畑

のあはひなるいとせはき道を行々て道明

寺に至る、此寺は都なるやんことなきあ

たりより女僧た、せ給へりとぞ、御寺いときら

やか也御堂は圓通のみ佛た、せ給ひ

かたへに天みつ御神の御宮あり、こは

此神の御手つからつかせ給ふとぞ、鳴は

こそわかれもうけれとよみ給へりしにて

此里は今に鶏をかはすとなく、覺寿

尼公の人かた御堂に有、坊中に

三宝の梅といへるあり、此梅の実、年中

落ることなくあからむことなしとぞ、坊のうし

ろに木樅樹といへる名木有いと

大木也、爰を立出て菅田の御社に

まうつ、いとふりたる御社ことにたふとし

左のかたに車樂堂といへる有、難波の

處々の神、の御まつりは此車樂也、其

作りさまはた物の音も東とかはりていと

ひなひたり、此みやしろ成車樂は日の本

に始て作れるとぞ、難波にて常に目馴

しよりはいと大き也、右の方石の反橋

をわたれば、奥の院地藏菩薩た、せ給へり

かたへに龍の池關伽井なといふりたる

あり、またかたはらに綾杉とて大木のすぎ

有、うしろなる高き御山には帝の

みさ、きあり、石階段いと高くして左右より

草生たり、苔むしたる石の燈籠数

おほく並立、其ひまゝに松桜並立、

おのつからふりたるさまいととふとけ也、

御廟のめぐりあまた、ひ拝し奉てまかてぬ

夫より大黒村てふ處に至る、いと清らなる

河原をわたり大こく寺てふ御寺にまうつ

こ、にしつまります大黒天八日の

本に始て渡らせ給ふ御神也とぞ、

前なる河原に日毎に壺つつ、此御神

のみかたちしたる石なかる、といへとも

是をひろふ者と稀なりとかや、猶行

て壺井村に至る、いと大きな石の

鳥居をすこし隔て石階のもとに

井あり、是なむ壺井と唱へてゆゑよし

ある井也とぞ、水いと清け也

くみてしる壺井の水の深からぬ

恵になひくよもの民艸

石階を登れば御社いときらやかなり

八幡の御宮居いと、ふとし、うしろなる

高き山々には松杉陰くらきまで生

しけりたるいと物すこし、かなたこなた拝

しめくりて爰を立出、通法寺に至る

いとふりたる御寺のさまたふとけなり

御堂はいとさ、やかにて阿弥陀佛た、せ

給ふ、かたへに頼義公のおくつきとて

圓通菩薩の御堂有、左の方ほそき道

を壺町あまり行てすこし高き處に

頼信公のおくつきとてさ、やかなる山の上に

松一本たてるのみ、またすこし左の方

におなしさまなる山に松のみ

立たる、爰は義家公のおくつき也とぞ、

あまたの星霜かさなれるゆゑにや苔

むせる石さへなし、いとたふとくもまた

哀にこそ

ふみ、るも猶かしこしな跡たれて

絶す通へる法の道しは

夫より磯長山叡福寺にまうつ、こは

世に上ノ太子と唱ふいと廣やかにして

ふりたるさまたふとたとへなし、山門

中門うち過て左の方に聖徳太子

の御堂有、こはみ手つから作らせ給ふ尊

影也とぞ、其御顔はせさなから生る

にことならず、物の給ふへき、みあり

さまいとたふとくて、おそるゝ拝しまつり

てまかてぬ、向ひなる御墓山は太子の

御廟なりとかや、其めぐりいと高き石の

玉垣立たり、手のと、くへきあたりに

さまゝの艸生たる、かかゝる御山に生し

草とおもへれば心なき小草すらたふと

けにみゆるもをかし、御山の中

よりはいと大きな木ともさし出て

陰くらきまで繁りたり、此石の玉垣は

弘法大師たて給ふとかや、其数いと

おほくしてかそふる度におなし

からすといへるにいとふかしければ

ともなへる人々かそふるに其数みついつ、

ほともたかへり、おなし人式度よみ、

れは式度共にたかへり、いとふしきのことよと人々言あへり

#### 御墓山石の玉垣代々遠く

たてしやいつの昔なるらむ

御山の中より左の方にいと高くさし出たる楠あり、大乗木と名つくとぞ、こは太子の御母公かくれさせ給へりし御から納し御車の轡をこゝに太子の

御手つからさゝせ給へりしに、かく枝葉しけりたるとなむ、右の方なる一きは

高き山ハ五字か嶺とかや、よへり登りてみれば所々の田畑また山々まで隈なくみ渡され、其なかめたとへん方なし

此御山は昔、紫の雲棚引し處也

とぞ、かくみること聞こと／＼に目も心も驚るゝ斗たふとさ限り無て、すゝろに袂をうるほしける、御門を出て向ひなる坂路を登れば西方院といへる尼寺有

御門の前に三姫の墓とてみつ

並ていとふりたる有、此御寺の尼君には故有て難波にてまみへしことあれは

あないを乞て入けるに、大方ならすもてなし給ふ、しはし物語て爰を立出やかて家路におもむきぬ、難波

より爰まで五里にあまりぬへし、式里餘り難波ちかくなりて玉手山といへる御山にまうつ、いと高き坂路を登れば左の方に御堂あり、きらやかに

していとたふとけ也、また一きは登れハ右の方を國見の岡といへり、いつゝの國は

只目の下にみえ、西の國々山々浦々までみわたされ、其詠さらにたとふる物なしかたへに舟形の松とていと大きな

舟のかたちしたる松あり、此松の上に登らんには猶遠き國々のみえもやせむといとめつらかにおほえて

うち乗て行てみよとや舟かたの

松は國見の岡に立らむ

山の名の玉ひろふてふ蟹ならハ

乗てみましを舟かたの松

こゝをおりてすこしなたらかなる處にいとをかしうつくりなしたる庵あり筑垣の中に龍眼肉てふ木有、こは

尾州の殿よりをさめ給へるとそ目馴ぬ木のさまなれは人してとはせけるにかくこたへぬ、猶左にそひ行は小草いたくしける中にわらひおほくおひ

出たるを見捨かたくていさゝか摘もて帰りぬ、爰より右の方に尾州の殿代々の御墓立並たり、其めくり朱の玉垣

にしていときらやかなり、爰よりもとの坂路を麓におりぬ、また壺里あまり難波ちかくに棕樹山勝軍寺てふ

御寺にまうつ、こは世に下の

太子と唱ふ御堂はいとさゝやかなれと聖徳太子植髮の尊影みてつから作らせ給ふとぞ、御堂の向ひに垣結め

くらしいてと大きな棕の木有、こは大かたならぬ故有木にして御寺の名にもよへるとなむ、昔ハ御寺も大きやか

成しか今ハ只かた斗残れとも、棕の木は猶くちすしていさを世々に傳へける

とぞ、御門の外に守屋の連のおく

つき、はた首洗の池なといへる有、いとさゝやかなれといと物すこき心ちす、爰を過て平野の里に至りし比は申の

半も過たり、こゝより難波へ式里餘り、駕籠をやとひてそやの比帰つきぬ、けふの道ハ行来山坂にていとうしぬれば

やかてうちふしぬ

弥生中はの比、桜の宮の賑はひ大かたならず、淀川にそひて式丁餘り桜うゑ並たれば、舟にて行もあり陸より

行も、おのかしゝ花の本に氈引てうたふ有まふあり、いと目覚る斗になむ、御社の中には大木の桜ありて

ことにうるはし

春ことにとひ来る人は神垣の

さくらかもとに絶ささりける

名におへる神のいかきに咲出て

よしにかをれるさくらはなかな

生玉の御社も桜いとおほし、安井の天神のみやしるもまたおなし、降専寺の糸さくら桃谷の花さかり其にさはひ

大方ならず、桃の畑中に梅の家と唱ふる茶亭あり、爰は東なる梅か家にまねひいとみやひたる作りさまにて庭

いと廣やか也、此庭の山より桃山四方にみわたされ、只一よふに紅なるひま／＼に菜の花の黄なる、麦の所々に青々たる

さらに錦敷たらんかとおほゆと、爰より  
すこし隔て野中の観音堂といへる有、  
こゝにも糸さくらおほし

野田の藤、浦江の杜若、茨住吉の杜若  
藤、小堀口の杜若、赤河のかきつはた、月  
江寺の藤、十三の藤、浮瀬西照庵の  
花見など、其處々の賑はひおろかなる  
筆もて尽すへからず

卯月はしめのふつかより八日まで、河内の  
國なる野崎の圓通のみ佛無縁經とて  
いと賑はし、難波より三里河舟にて  
行もあり、あるは陸にて行かひさまに  
物言かはした歌うたふも有、いとむつ  
ましけに高き賤しき隔なき

さまざまに御佛の靈験いちし  
るき故ならむかし、一とせみつといへる  
に舟にてまうてけるに、咲残り  
たる花の水に散葉の花  
のかなたこなたに咲たる、えもいひかたき  
に行かふ人の物思ひなけに  
みゆるもをかし

恵みかはし袖引つれてしるしらぬ  
春の野崎にあそふ諸人

水の面に散うく花はおのつから  
春せきとめし心ちこそすれ

卯月八日にはつゝ、しの花を竹に  
結付、軒はに高くさし出して  
花供養と唱ふ

おなしこ、ぬかには、和國寺てふ  
御寺に植木市とて諸國より

さま／＼の大木をあつめ持寄て、ひさ  
くこと其賑ひ大方ならず、またこと國  
に有へくもあらず

中のなぬかは東照の御神御まつり  
いと賑はし、こは高き司々のかた／＼も  
まうてさせ給ひおほやけのおきて  
おろそかならず、たふとくもまた目覺し  
きまてになむ

五月いつか軒はにさうふとせん檀  
の葉をかくる、遠きむかしはなへてかく  
せんたをかけしと古き文にも  
ありとかや、めつらかにおほえていと  
をかし

軒のつまにさせるあやめのあやなくも

昔のことと思はれにける

水無月朔日勝鬘院毘沙門堂愛染  
堂いと賑はへり、此山の奥に家隆卿の  
おくつき有、すへて此あたりはふりたる碑  
いとおほし、此坂下をすくに行は  
新清水寺とて高き石階を登りて  
圓通菩薩の御堂有、石階のもとに  
逢坂の清水とていと清き流れあり

こゝより野道をすくに一町あまり行は  
一心寺といへる御寺の坂下に増井の  
清水といへる有、いときよくして行來の  
人絶すこゝにいこへり、爰より天王寺に  
いとちかし亀井増井逢坂の三名水  
とていと名高しとぞ、此坂を登れば  
一心寺てふ御寺也、昔はいと大きやかに  
して大方ならぬ故よし有御寺とかや

今はさまで廣からねと昔おほえて  
いとたふとし、御堂の左の方に茶臼山  
みゆ、御堂に向ひて右の方に

本田何かしのおくつき有、こは元和の  
みたれに此あたりにてをはりし人  
成とかや、今の世にうつくしき  
名を残せるもいと哀にこそ、かたへに  
家臣の名々のおくつきも有、御門の  
向ひに福屋といへる名高き

酒樓有てまらうと絶すいと賑はし  
水無月半の比より難波橋のすゝみいと  
賑はへり、橋の向ひなる肥前の殿の御屋  
敷前に茶亭おほく並立て爰二

いこふ人引もきらず、はた水のおもは  
さしにも廣き淀河處せきまで  
大舟小ふねさしつとひ、ともしつれたる  
其の影は星よりも猶しけく、天に  
かゝやき水をてらし、さなから昼に  
ことならず、はた花火の目さましき東  
なるふた國かけし橋のもとにも  
はるかにまさりぬへくそおもほえ  
ぬる

涼する人のこゝろもいとと広き  
淀の河せの舟そにきはふ

おなし日の中のかには住よし  
御輿洗の神事いと賑はし、此日うしほ  
に身をひたせはも、のやまひをいやす  
とかや、遠き國々よりもつとひ来て爰に  
しほあみする人いと目覺しきまでおほ  
かり、はた舟にてもうつるもすくなからねハ

濱邊の賑はひとへん方なし

十五日は鳥の内三津八幡宮御祭

十七日御堂の宮

十九日高津の宮

廿一日博労稲荷

廿二日座摩ノ宮

廿五日天満ノ宮

廿六日豊津稲荷

廿八日生玉ノ宮

晦日住吉名越の御祭

住よしの御神は月毎に御祭

にきはしく、年に七十五日度御祭

有とかや、されとも水無月つこもりを

大まつりと唱へ其賑はひ大方ならず、

はた所々の御神もいとにきはしく、町々を

引もてあるく車楽のはやしたつる音は

日々天地にと、ろきかしましまきて

目覚しくなむことに、天み津御神

ハ難波橋より安治河まで舟にてわたらせ

給ふ、御送りふね迎ひ舟簀ふねなとこそり

て、さらに水の色もわかぬまで其

賑はしさあけてかそへ盡すへからず、

東とかはり美々しからねと賑はし

さは亦こと處に有ともおほえす

文月の燈籠七夕まつり東に異

なることなし、おんごくおとりとてめのわら

はうちつとひ歌うたひ町々をありく

さまいと鄙めきたり

中のいつか亥の比ほひより七墓参り

とて男女うちましましり、さま／＼の出立

してうかれあるくいとめつらか也、暁

比には聲しつかにねほれる

顔して帰行さまいとをかし

十六日八千日参りとて天王寺いと賑はし

此日まうつれは千日まうつるにおなし

といひならはせり、

八月朔日町の長たる人々、此たちに

ゐやのへんとて暁ころよりうちつとふ

こと目覚しまきて、御もんの前市をなせり

中の五日、月見のさまは東におなし、

萩は今宮三番てふ所いとおほし、

重陽はた後の月見も東におなし、

一とせ長月半はかり住よしまうてん

とて阿倍野を過けるに、左の方ニ

晴明の宮とていとふりたる御社有、其ほとり

艸の花色々咲みたれたるに虫の聲

ひまなく聞ゆる、いと哀にて

ふりすて、行もやられす名におへる

阿部の、原にす、むしの聲

虫の音はつゝりさせてふ秋の、に

いかてほころふ花の色々

爰の里長何かしのもとに葛の葉の

額ありと聞ゆ、いとゆかしくてあないを乞

彼額みむ事を人していはせければ、いと

いと廣やかなる出ぬをかきはらひ、やかて

いたくふるひたる箱に錠おろし

たるを持出けるか、いと長々と其存よしを

かたりつゝとり出てみせけるか、いたく年

ふりて其文字すら處々墨消てよむへ

からす、皆うちこそりて見てやかて爰を立

出ける

尋来てさらに昔を思ふ哉

しのたの杜の世々のふること

夫より住よしへとておもむくに、野中二

小町塚松虫塚頭家卿の塚なといへるいと

ふりたる碑おほく立たるは、ことのよしを

定かに聞もあきらめねといとあはれ

になむ、やかて御社に至るころ

雨ふり出ければ

さためなき空さへ嬉し住吉の

松の木陰に雨やとりして

村雨もよしといはしな立よらむ

松陰おほき住よしの浦

夕附て家に帰りぬ、

神無月ハ難波もさせる賑はひなし、只

寺々に十夜と歎唱へて老たる人の

つとふのみ、末の一日より八日まで東西

の御堂参りいとはしはし、

霜月道頓堀歌舞伎の賑はひ東に

ましていと目覚し、およそ歌舞伎の

年中の賑はひまた外に有へか

らすとそ、

中の五日わらはへの神まうて東に

おなし、

廿日比より都六条参りとて遠き國々より

まう来る人いとおほく、淀川の舟引も

きらす其にきはひ大かたならず

十二月年のをはりは何國もおなし、

いさましさなるをまして人さはかしき

所のならはしなれば其かしましき



おしはかりぬへし、さハれ世のわさ  
しけき中にしも年わすれと歟  
唱へてをちこちの酒樓にまらうと

絶間なくいと賑はじ、されは花紅葉の  
をりく／＼に袖をつらね老たる若きの  
わいためなくうかれ出る其賑はひ、中々  
におろかなる筆に尽すへから

す、いとかしましうはしたなきさま  
にみゆる物から、かく物めつるも  
おのつから人の心なこくみやひたらむ  
かとおもへれば、いとをかしうなむ

蘆の葉風 終

[illegible]

在明の月 四

在明の月 月の屋

弥生中のいつより末の一日まで中山寺  
無縁経とていと賑はへり、難波より此  
御寺まで道のほと五里に餘りぬ

へし、一とせ此御寺にまうてんとて

此月の廿一日といへるに難波を立出

十三神崎さきなどといへる渡シうちわたり、行

く伊丹の町に至る、入口右の方に

猪名のさ、原とていとさ、やかなる藪

有、此あたりより有馬のあたり迄を古し

へは、すべて猪名の里といへりしとそ

こは定かにしるよしあらねと、伊

丹の里をさ何かしのいひをしへしに

よてかう物しぬ、伊丹の町はいと廣

やかにして其賑はひ大方ならず、家々も

いとうるはし、酒蔵のおほきやかさ菰包

の樽つみ上たる、其香巷に満々て

酔へる斗也、かゝるさまは東にて見も

ならはねは心驚く斗二なむ、此町を過れ

ハいと廣き野にてはるかに山々みえ

けしきよしはたまたまち餘り行に、左の

かたに昆陽の池みゆ、此池

なる魚はかたつかた焼たることしとかや

昔たふときひしりやきたる魚を

爰にはなち給ひしに其魚生かへ

りしとぞ、されは今の世までも焼た

る跡残り、はた此魚とり食すればあしき

やまひをうくるとなむ、菩薩の應驗

いちしるきをしへを爰に残さし給ふ  
いとたふとし

住なる、魚の心もおのつから

のとかにみゆる昆陽の池水

三十町斗も行て御山の麓に至る、

こゝは鄙に似けなく、旅舎もいと

きらひやかに軒をならふる中にも

若夷といへるは殊に其名高く聞えれは

まらうとおほく爰につとへり、けふ

こゝに着しは申の半も過たるへし

左の方なる小門より入に、いとほそき

河に土橋かゝれり、此河ハ中山の

御寺の中よりつゝきて勅使川と

名つく、こは大方ならぬ故よし有とぞ、

しはしいこひて扱庭へとておりたつ、右の

かたにいと広き池ありてかきつはた

やうく咲出たるに、うしろの高き

芝山に三もと斗並たる桜、をりく

水に散うくもいとをかし、山の頂に

いとみやひたる亭有、かゝる所にすま

ほしくそおほゆ、其かたへに高樓有

登りて見れば向ひはるかに武庫山

みゆ、うしろの方を返りみれハ甲山、はた

和田のみさき其外名高き山々浦々

只一目にみわたさるゝなど、さらに

言んかたなし、爰をおりて左にをれ

行はいと廣き處に桜おほく並

たる八重はまたしきほと成に、ひとへハ

今をさかりと咲みたれをりくちる

花の袖にかゝれるは匂へる雪かとあや

またるゝもいとをかし、向ひなる竹の  
網戸をひらきて外に出れハ、すこし  
高き所に李おほくうゑ並たる

しろ妙に咲みたれたる花は雪とも

おほめかるゝ物から、かたへ成さくらに

たくふれハいと見おとりせらるゝに

其匂ひはたゆかしけなきそ口をし

きや、かたへなる畑には茶藨なとくさく

の若はえおほくおひたるは、秋いとゆか

しくおもほえて、中々に匂ひなき

花の咲たらむにはまさりていとをかし

此うしろはいと高き山也、登りてみむ

とおもへと、はやたそかれ成にいと物

すこくてやみぬ、もとのあみ戸を入て右に

そひ行は、いとさ、やかなる瀧有、下は清

き流れ也、こはおのつからなる山水

をたゝへたれば、其清さまた異也、かたへ

の杜の中には稲荷のみやしるあり

此あたりはさらに旅舎などの庭

としもみえず、人はなれし山路を分

まどひしかとおもふまていと物すこし、左の

方には塩風呂とやらむ其作りさまいとをかし

はたかたへは木共おほくうゑ並石の燈籠

敷石なといとをかしうすゑなしたり

かなたこなたに亭有つれと、こゝなる

龍ノ間と名つけしハいと詠よければ

かりまうけて一夜の居處とさたむ、日暮

ぬれハ、あるしのもてなしとておほくの

花のもとにあかしともしたるに

さきに一わたりみめぐりつる庭を爰にて

みれハ、また一きはのなかめそひて、木の本に  
立まされるとはさも思はさりし、かなた  
こなたの花は只雪歟雲かとうたかはれ  
さと吹風ハ寒からて、其匂ひまたこよなし  
しはしうち興し、かゝるさまは世に  
おほかるましく、さらにめかれぬ物  
から、いたく夜も更ぬるにまたあす  
こそとてうちふしぬ

廿二日またきにおき出て、夜桜のなかめ  
はよへにてたりぬへし、いさ朝さくらを  
とて立出るに、いつかおほくのまらうと  
こ、かしこにむれぬつゝ、おのかし、花  
めつる心はいかなるふしをやおもふらむ  
いとをかし、うしろの高き山の端より  
朝日はのくんとさし出るに、花も一きはの  
匂ひそひたらん心ちして、さらに似る  
物なくそおほえける

諸人の心も共にさし出る

朝日に匂ふ花の中山

あるしあないして御山にまうつ、御門  
の前にハいとふりたる松左右にたてり  
しはし行て向ひなる高き石階を登れハ  
御堂いと大きやかにしていとたふとし  
こは西國廿四番にあたらせ給ふ圓

通のみ佛也、しはし拝し奉りて

御堂のうしろなる一きは高き石階を  
登れは、桜おほく並て今をさかりと  
咲みたれたり、はた楓もおほく若葉  
春めきたるもいとをかし、こゝよりも遠き  
山々浦々みえわたりいとなかめよし、左の

方なるほそい石階をおりて猶、かなた

こなたをかみめぐりてもとの石階をおるれハ  
右のかたにいと大なる石の祠あり、  
中はいと廣やかなれともくらくして

さも物すこし、此處は其かみ、いとたけき

王子の水におほれてうせ給へりし

みたまを爰に鎮まつりしとなむ

爰よりすこし左のかたに奥ノ院道

とていとけはしけ成坂路あり、登りて

まうてんとおもへと、けふ有馬に

おもむかむことを人々そゝのかせは、さらハ

歸りにこそとてやみぬ、扱若夷に

立かへりて、ことよくとゝのへ立出むとするに

あるしのもてなしいとあつかりければ

また帰を契りて立出ぬ、御寺を右に

見つゝ、すぐに行は、左右いと廣々たる

野道にてけしきいとよし、壺里餘り

行て生瀬といへる駅にいこひ、猶

ゆけは有馬と三田トのわかれ道あり

三田の里は九鬼の殿のしらし給ふ處

とそ、向ひに土橋かゝれり、かたへハいと

高き山にて下は清き石河也、左のかた

河原にそひゆくに、其なかめまた

たとへんかたなし、およそ遠こちの山々

河々見めぐりたるはおほけれど、こゝは

常に人の物語しこともあらねは

心驚斗、えもいはれぬさま中々に

画にも移しかたからんとそおほえぬる

さはあれと心なき身のさかなれは、たゞ

うちあふきみもて行のみせんすへなし

爰より五十町あまり河原にて人家一軒

たにあらず、左右いと高き山々そひへ

見あるく斗の大岩並たるいとすさまし

河原には大なる石ともまろひて道いと

けはし、四五ひろまた七八ひろも間を隔

てほそき流の数しらぬまておほかり

されと板橋たになくうちまたけて

行に、常は水いとほそけれど、いさゝ

かにても雨ふれば、山水あふれてこえ

かたしとそ、爰を四十八瀬と名つくる

此ゆゑとかや、乗物にてわたるすら其

おそろしさ言へうもあらぬに、かち

にて行人のわつらはしきおもひやられぬ

木曾の山路にましておそろしき

心ちせらるゝもかく人すくなにて行故

成へし、からうして爰を過ぬれば

またむねつく斗いとけはしき坂路

也、こゝも壺里あまりの山みちに

あやしの小家たになけれハ、行

なつみては木の根はた石なとにこし

うちかえていこひつゝ、からうして

有馬の町の入口に至る、いとほそき坂

路をおりつれば、旅亭軒をつらねていと

賑はへり、爰も山より山に家をつくり

懸たれば、前よりはさもあらぬ家のうしろ

のかたは二階三階ともみゆ、外にては

目馴ぬさま也、かく山ふところなれとも

薬師佛の靈験あらたに出湯の

きとくいちしるく、こゝにつとへるまらう

と絶間なく、はた所に名たる竹

さいく糸さいくひさく家々軒をならへ  
また酒樓の賑はひ大方ならず

温泉は町のなからにたてり、室の  
中を隔て南北に入口ありて一ノ湯二ノ  
湯と唱ふ、二ノ湯の向ひなる池の坊に  
やとりを定む、爰に着しは申のさかり  
成へし、おちゐて後幕湯でふこと  
せさせて入ぬ、暮はて、湯女をつとへ  
つるに、其さまいとゐなかひたれと  
まらうとのあつかひになれたるは  
いとにくからず、しはしうち興して  
そや過る比うちふしぬ

廿三日でいけいとよく、今日なむ音にきく  
つ、みの瀧有明さくらみむとて、湯女二人  
つれて立いつ、此町はいと賑はしけれと  
其道直からず、あるは登りあるはくたり  
て十丁あまり行は、左のかたにいと廣き  
藪あり、こゝを左にをれ行はいとほそき  
道にして左右より竹おひたり、處々に  
さし出たる桜は皆一重にて花

ちいさし、こゝは山の中なれはいとひや、  
かにして、今弥生の末なれと八重は中々  
ほころふへくもあらず、しはし行は左右  
山にていと廣き處に至る、桜おほく  
並立て咲みたれるさまいとうるはし

爰に昔は有明てふ名高きさくら  
ありしか、いつの比に歟枯て今ハなへ  
て、此あたりの桜をあり明とよへるとそ  
左のかた山のなかななるつゝ、みか瀧とい  
へるは、さまで高からねは打わたすしら

糸としもみえねと、其流れいとけは  
しく目くるめく斗になむ、花の

本にはおほくのまらうと打つとひ  
氈引まうけさ、へなとり出ていこへり  
爰につとへる人々は、皆軒を並し  
家にやとれる人々なれば、かたみにみなれ  
し顔なるを、こゝにつとひかしこに  
うちむれはた袖引追まはし物あら  
そへるなど、年比したしき友にことならず  
咲みたれたる花は猶高き賤しき隔なく  
袖にかをり桂に匂へるもえならぬに  
をりく散花は蝶のむつれ飛か  
ともあやまたるゝいとをかし

旅のうさもうち流しけり名におへる  
つゝ、みの瀧の今日のまとゐに  
打よするつゝ、みの瀧のしら糸に  
あやおりかくる花さくら哉  
有明の月と名におふ山さくら

いさみはやさむ花の下陰  
あかぬ詠に時移りぬれは、こを立て  
もとの道にと帰り来る、町のはつれに  
清水てふ酒樓あり、家のさまは心ある  
へくもあらず、はた前栽も廣からねと  
向ひにおのつからなるいと高き山を  
みわたし、下なる流れハせきも入ねと絶す  
なかるゝさまいと清け也、庭のかたへに  
咲みたれたるつゝ、しの前なる水に移ろふハ  
立田河の秋もかくやとおもほゆるまていと  
をかし、はるかななる山郷より薪おひ下る  
柴人あれば、麓より牛引わらは登り行

有、こなたの谷河にははだへいとくろみ  
あかきかしら髪ふりみたししわらはへみたり  
よたりうちつとひるて魚なと取にや、こなた  
こなたかけめくるなど、東にても難波にて  
もかゝるさまは見も馴ねはいとめつらかに  
おほえてをかし、かく物おもひなきなかめ二  
日を過さむにはいかなるやまひもとみに  
いゆへく、けに有馬の温泉と世に  
言もてはやすもむへ也けり

有馬山嶺に麓に咲花の  
匂ひ出湯の末もなつかし  
いささらはあみてを行む塩の湯に  
からき浮世のことやわするゝ

廿四日こゝに名高き常喜山に  
たゝせ給ふ、いとたふとき薬師寺にまう  
てんとて供の人々つとひて出ぬ、町のなから  
なる石階を登れば御堂いと廣やか也、  
御帳のかたへに黄かねの如き石を  
臺のうへにすゑたり、此ことき石地中  
におほく有て、其勢いて温泉  
出るとかや、御堂の向ひに落葉山  
みゆ、いとはるかなれと木々の青々たる其  
ひまぐくに、しら雲のかゝるとみゆるは  
桜にやあらむいとをかし

落葉山秋の梢のいかならむ  
春の緑のさもふかくして  
返りみる落はの山の山風に  
匂へる雲やさくらなるらむ  
かくてかなたこなたみもて行に、空いたう  
くもりたればやとりに帰りぬ、夕つ方

より雨降出ぬ、くしたる人々うちこそり  
て明日一日雨ふらは四十八瀬いとむつ  
かしからん、あす八つとめてこゝを立出む  
など言あへるに、あわてまとひてその  
まうけをなしぬ

廿五日雨もさまでつよからね は 四十八瀬  
たにこえたらんにはうれへなし、

けふは中山にやとりてあすゆるや

かに難波に帰らむとて巳の比ほひ二  
爰を立出ぬ、四十八瀬に至るころは

雨もをやみかちなれと、よへつよくふれる  
にや、さきつ日とはやうかはり水いと

高かり、石道のけはしきは乗物の中

すら安からぬに、供人等は笠うち

かふり桐油引懸竹杖つきて水

おほかる處をは、あなやといひて飛こゆるさまはさなから猿にことならねは

獨りうち急まるゝ物から、行なつめる

人々の心いかならむと、わらひをしのひて  
打過行に、ひつしさかる比中

山につきぬ

廿六日空いとよく晴たれば、心のとかにこゝを立出、伊丹より久々地の妙見宮にまうて、神崎十三のわたしもはやく打わたり、申の半斗難波に帰りぬ

在明の月終

張屋中れり。……事お一……。中ひも  
 を無難とせしむ。然るに、此の如くは  
 佛にもそなたにこそ五里の一歩ある  
 處——一と云ひ佛なるもの……人々  
 いひたすをといふ。……此のまゝな  
 十云の如き……これにては……  
 く……仔細の町……いふ……  
 ね……それ……平……い……や……

ともあつていふは  
 持れどもいふは  
 つみふれどもいふは  
 丹にふれどもいふは  
 あつていふは  
 丹にふれどもいふは  
 あつていふは

東のつと 六

あつまのつと

文政十とせあまりふたとせといふとしの弥生はしめのなぬかの夕つかた、おほやけよりめしふみ着たりとて上下こそりてそのまうけいといそかし

こ、ぬかといへるに町々にふれしらし給へは、まゐ来る人いとかしまし十一日にみたちへ常に出入せし

人々めさせ給ひて御わかれをつけ給ふおなし三日といへるに難波をかしま立せさせ給ふ、朝またきにみたちの前なる濱よりみふねにのらせ給ふに、日比

御恵をかうふり奉りし人々はいへはさら也、しるしらぬ老も若きも御わかれを、しみ奉りてうちむれまゐりぬ、ましておいたるなどは目をすりはなうちかみて、かく御恵ふかき君にまた逢奉らんやはなといひくみふねみゆるまで見送り奉る、いと目覚るまてになむ、けに

下をあはれみうつくしみ給へりし事よのつねならさりしかは、かゝるもむへ成かな、さるは残らせ給ふ女君にけふのことふき申はて、後、おのかとち跡よりまかるへきまうけにいとなく日をおくり、大かたにことと、のひて、いさや難波の名残とて、遠こち見めくれとみたちにのこれる人のおほからぬに、いと物たらぬ事のみにて、只東の音つれをのみ

待けるに、おなし弥生の末つ

かた、ある人のそ、のかして長柄の鶴満寺より宗せん寺の花見にとておもむきぬ、天満橋をすくにふたまち斗を過て野道に出、左右なのはな

いみしう咲たり、しはし行は鶴満てふ御寺也、爰に名におふ系桜さかりハはや過たれと、木の本にむれゐたるもすくなからず、かなたこなたにさくなどとう出たるもいとをかし

おもふことなからの寺の糸さくら絶すよりくる春の諸人くり返し見てを帰む糸桜

いとなかき日もあかぬ心に爰を立出、よまちあまり行てなからのふねにのるに、左の方向ひはるかに長柄の桃はやしみわたされいとよきなかめ也、されとも今は難波の名残とおもへはみる物聞物にむねふたかる心ちしてさらに目うつるへくもあらず、うまれ出し處ならねとや、物のこゝろしるらむ年のころより、爰にあまたの年月をかさね

し心はたれもかく有へきにや、はるか行て左の方なる野中二鶯塚と彫ていとふりたる塚あり、めくりにもと斗たてる梅は幾とせをかふりぬらんとゆかし

咲き匂ふ梅の梢に鶯は

昔なからの音をや鳴らん行々て宗禪寺の馬場に至る、いと、廣

やかにて松おほくたてる中に桜の處々に咲たるいとをかし、かなたこなたの木陰に艶引まうけさゝへなとり出てうちたはれ花みる人の心は高いやしき隔なくみゆるもをかし

立ならふ松もさくらもとくくにくみかはす也春のさかつき

右の方に竹垣経めくらしたるは宗禪寺といへる御寺とかや、御堂はいと、たふとき圓通のみ佛たゝせ給ふに

此ころみてふひらきてをかまれさせ給へハまうつる人の殊におほし、此處に

いつの比にか有けむ弟のかたきうたんとせしはらからの者かたきの為にあさむかれあへなく返りうたれしとなむ、其相持しはらからの者の太刀長刀着たる物なと御寺にをさまれるを、み佛をかませ給ふ寺邊に人々にみするいとあはれに酔も覚ぬへき心ちして立出むとするにも、只み佛のみ名唱へまつるもいとかなし

中々に共に消なてよ、遠く

残る其名やわひしかるらむ東に帰てはけふのまとも昔語にこそなと人々いひくてひめもすあそひ暮して、やかて爰を跡になし家路をさして帰むとなからのわたしもはやく打わたり、けふともなひつる何かしかり立よりて家とちはしめ人々に長き旅ゐに大方ならぬ恵を喜び聞えなど

かたみに盡ぬ名残を、しみて爰を立出  
淀川のほとりに至る比、都登りの夕舟  
あまた引つれ行もいとをかし

淀河のよとみもやらて行舟に

やかてかゝれる夕かすみ哉

暮過る比家に帰ぬ、卯月ふつかと  
いへるに人々ともなひ難波村のほとり  
見ありくほと、松の尾といへる酒樓にいこひぬ  
爰はさもあらぬ茶亭成しか、さきつとし  
火にあひて後いよく家作り庭の  
さまいとをかしう、池のほとりの芝山など  
みめくるに桜ははや過たれとあやめと  
いへる草のやうく咲出たるいとをかし

葉かくれに咲る汀のあやめ草

あやなく水に影匂ふ也

こは今の世にあやめといへる花にて  
昔のにはあらずしはしうち興して  
こゝを立出、河向ひなる大津湯に至る  
爰は温泉をまねひたる酒樓にて  
まらうと絶すいと賑はし、高樓に登れば  
難波の村里一目にみわたされいとよき  
なかめなり、しはしいこひて爰をたち出  
少し左の方なる瑞龍寺てふ御寺に  
まうて、夫より道頓堀の濱より舟に  
うち乗夕つかた家に帰ぬ、日の  
ちかきあたりをみもて行ほと、此月の  
六日といへるに東より消息して  
大うへのいとこよなき司にならせ  
給へりしをいひおこせぬるに、夏野の  
草の露待えたる心さしていとも

かしこきおほやけのおほん恵をあふき  
奉りかたみに喜び聞えあひぬる、其  
うれしさはたたとしへなし、されハ

十一日といへるに爰をうち立事とは成ぬ、

十日雨いたう降風あらかり朝またきより

人々まう来て旅の調度何くれと物する

ほとはやく事よくとゝのひぬ、夕つかたより

みきとう出て人々に長きわかれを

告るに、亦逢みん事のかたければ

はかなきこと共いひくゝて夜もすからかたり

あかしつゝ、はや明ちかく成ぬれば家の

隅々見めぐりはた庭の本草にまで

名残をしむに心つからか暁の露

さへ常よりいとふかうおほえぬ、しのゝめ

つくる比いさとて人とのそゝのかすに今は

かたみにむねのみふたかりいふへき

こともあらず、かくてやむへき事なら

ねはかたみにいさめいさめくれつ、袂を

わかちしは只夢とのみたとられて

またとしもかたみにいはすいはれぬ

はいやはかなゝるけふの別路

十一日雨はやみたれと風いとあらし、

六ツ過る比なれし私たちを立出る、名残

をしささらにもいはす、只かなたこなたと

返りみらるゝのみせんすへなし、松屋町

すちを北に向ひ、天神橋のほとりより

左にをれ八軒家もうち過京橋に至る、

爰より送りの人々半斗いとまをつけて

立別ぬ、片町といへるを過て野道に至る、

爰は京街道となむよへり、かなたこなた

の小田にはきのふの雨に水まして  
蛙の聲ひまなく聞ゆる、いと哀にて  
わかれこし心を水の下にしも

しる歎蛙のもろ聲に鳴

行々て守口てふ處に至る、難波より三里、

爰にて人々いとねもころに別を告て

袂をわかちぬ、式里あまり行て枚方<sup>（枚）</sup>に

いこふほと風や、しつまりぬ、此すくのなか

ら斗に天の河てふ河有て名いと

高しけに、秋ならねとも別の袖の

露よりや、かく名まさりけむいとをかし

天の河秋ならなくに別ちを

せきとめよとや名まさりけん

此河の上は大和につゝきて下は淀河

に入に、其流れいとはけしくめくるめく

斗になむ、常はさもあらぬにや、きのふ

の雨いとおよき故成へし、猶行々て

八わたの御山の麓にいこふ、空いとよく

晴ぬ右の方はるかに御山を拝し、左に

行々て淀の大橋をうち渡り、いと長

き淀つゝみを伏見へとていそく、ほとはやく

も申の半はかりふし見の駅なる北國や

てふ家に着ぬ、よへ一夜いねされは

いたくこらしてはやくうちふしぬ

里の名のふしみても猶難波江の

わかれの袖はかわかさりけり

十二日ていけいとよく、またきにふし見を立

出て大津の駅に至る、呼次のはま

膳所をもうち過瀬田の橋のほとりにて

昼の物なととゝのへ、瀬田のはしを

わたるとて

渡行瀬田の長橋なからへハ

またも都の花をみてまし

右に石山をはるかにふしをかみ

て行、左のかたに三上山いとちかう

みゆ、猶行々て草津のすくのはしつ

方なる梅の木和中散てふ家にしはし

いこひて、七ツにはまたしき比石部の駅に

つきぬ

十三日ていけいとよくまたきにこゝを

立出るに、空やうくしらむ比、よもの

梢の縁いとふかうわたさるゝえも

いひかたきに、時鳥のをりくおとつるゝ

いとをかし

啼すて、行時鳥わか来し

心を空になくさめよとか

横田河を渡る比ハ空いと晴々として

日の影水に移りていと清らか也、

河向ひなる茶亭にいこひて水口の

うまやに至る、爰は加藤の殿の御城下

にていと賑はし、猶行は水口と

土山のすくのあはひなる野道のかたへ二

松尾河てふ小川有、其流れいと清く

してさらにめかれぬ物から、空いと

くもりて小雨降出たれは、いそきて爰を過

土山のうまやにいこふ、しはしいこへる

ほと雨やみたれと風いとあらし、鈴か山二

登る比風いよくつよく吹出て木立の

音おとろくしう、身もすくむはかり

いと物すこし、左のかたにいとふり

たる御社は田村明神とかや、乗物なから  
拝し参りて

鈴鹿山神のいかきにふりはへ

てぬさと手向む言葉もかな

吹すさふ風心せよさらてたに

物すさましきけふの山道

などおもひつゝ、行程、左右松並たちて

風いとあらく吹すさふ、向ひよりみたり斗の

旅人来かゝり、こなたの乗物そこゝと

さしのそくをみれば難波にて茶のをしへの

親とたのみし何かし也、こは弥生の

末つかた、あまてらすおほん神ニまうて

んとて立出しに、けふなむ其かへさ

なるゆくりなき對面を喜び聞えぬる

物から、言へき事もなかはいはて

立わかれしは中々に名残をし

すゝか山思ひもかけす逢みしは

人の心の誠なるらむ

山のいたゝきなるいとあやしの家にいこひ、

やかて山をおりむとするに、其けはしき

またいふ斗なし、からうして山をおり

坂ノ下てふすくにいこひ、猶山路を

たとるほと、左の方に筆捨山とかやいと

をかしき山のすかた成に、つゝしの

處々に咲たる其うるはしさたと

しくなし、爰の茶亭に豊前

の小倉の殿いこはせ給へりとして人おほく

立たれはむなく此を過行ぬ、むかし

名高き画たくみの此山のすかたえ移

さすして筆をこゝに捨しより

おへる山の名なりと聞つるに、けふかゝる  
さはりありて見捨て過ぬるいと本意

なし、猶行に左の方ハいと高き

山々そひえ、右の方はなたらかなる山の

すその草いとしけりたる中に

わらひのもえ出たる見捨かたくて

いさゝか打とらせぬ

末遠き東のつとにをりてまし

をりくみゆる山のわらひを

夕つかた関のうまやにやとりぬ、此

駅のはしつかたにいとあらたなる

地藏尊たゝせ給ふ、夜に入てまうてける

にいと廣やかなる御堂に

みあかしの影いとかすかにて、物すこく

久しくへえたへぬ心さして、しはし

拝して帰りぬ

十四日ていけよし、またきに立出るかなた

こなたの茶亭の軒に藤の花いみしう

咲かりたるに、やうく目覚るいとをかし

賤か家の軒はにかゝるふち波の

なみくならぬ明ほのゝ空

行々て亀山の駅に至る、いと高き坂

路をからうして登り、石川の殿の

御城前なる町を過れば、左右に並たてる

松かねにつゝしいとうるはしく咲

たり、右の方に庄野河てふ流れいと

清ら也、庄野のすくを過、山邊の里と

かやいへる處をも過行は左の方二薬師佛

の御堂いとふとけ也、空いとくもり

たれは乗物なから拝しまつりて



坂路を登り行に、俄に雨降出たれ

は、石薬師てふ駅のはしつかたにて

雨よそひなしていそくほと、雨やみ空いと

晴やかに成ぬ、杖つき坂などいへるを

うち過はやく四日市のうまやに至る、

しはしいこひて行二いと清き小河あり

四日市河とよふとかや、猶行はおなしさま

なる小河ふたつみつ有、何れも石河にて

流れいときよらかなり

おもふことうち流せとやこ、かしこ

清けに水の行にや有らむ

富田といへる駅にては家々にて焼はまくり

ひさけり、爰にしはしいこひて行に、

此あたりの賤か家々もめんの打ひもを賣る、

色々の糸してなひたるを軒に懸

たるいとうるはしくみゆ、夕つかた桑名

のすくに着そや、過る比より雨いたく

降出風さへあらければ、あすの舟出は

いかなといひくうちふしぬ

十五日雨風やみたれと空いとくらし

明はて、舟出するに、よものけしきも

みもわかす、雲いとふかし、されハ風いと

あらくして岸をはなれて行こと、矢の

如し

時のまた國を隔て行舟の

さしもはるけき東路の空

舟の中くらくしていとつれくなれハ

さ、へなととう出て何くれと物かたらひ

はては人々せんすへなくてうちふすに

まともなくはやく三里の河を

渡りて向に着、こ、は佐屋てふ駅にて

いと賑はし、しはしいこひて行に此

縄手道いとなかし、松のはやしのひま／＼二

紅はた黄なるさまくの草の花咲乱、

うるはしさいふ斗なし、されとをり／＼

雨降出ていとわひし、左の方はるかに

名古屋の御城みゆ、空晴やかならね

ば薄墨に画かけたるかとおもふ斗

いとかすか也、猶行々て名古屋と宮

のわかれ道あり、右にそひ宮の駅

に至る、其賑はしさ大方ならず、けに

鄙の中なる都とも言つへく町の

なから斗に立たる熱田の宮の

一ノ鳥居いと大き也、すこし隔て二の

鳥居もおなしさま也、猶行は左

の方なる御社いとたふとけなれと、

爰を過る比雨いたくふり出てさらに

顔むくへくもあらねは、乗物ながら

をかみて過けるこそいと口をし、はるか

過て雨やみぬ、笠寺てふ観音堂の

ほとりにしはしいこひて夕つかた

鳴海の駅にやとりぬ、夜に入て爰の

名におへるしほり木綿ひさく人おほ

くむれ来て、我さきと人々にす、むる

いとかしまし

かそふれは東の空もや、ちかく

なるみの里の旅ね嬉しも

十六日ていけよし、六つ過る比爰を立出

すこし行は有松といへる町也、よへつと

へりししほりやは皆爰にや、おなしみせ

いとおほく軒を並たる其家いときら

やか也、猶行々て尾張と三河の境の

小川あり、うちわたりていも河てふあひの

駅にしはしいこふ、はるか行て

池鯉鮒明神の御社有おりたちて

まうつ、いとふりたる御やしろたふとき

言へくもあらず、苔おひたる御池に

おほくあそへる魚もおのつから御神

のみ名おへれはかたふとけにみゆ、かなた

こなた拝して立出、池鯉鮒のうまやを

過れはいと長き松のはやし也、此あたり

にをのわらはおほくつとひあて、よつ

竹と歎いへる物ならし聲をかしう

歌うたひて物こふあり、猶行て左の方ニ

業平八橋の跡と彫たる碑あり

すこし隔て業平の観音彫たる

碑たちて、いとさ、やかなる御堂あり、

此あたりは其かみ彼卿東下りとかや、

世のことわざに言傳ふる跡なりと

聞もいとゆかし

から衣着つ、なれにし言のはハ

昔を忍ふつまとこそなれ

行々て岡崎の駅に至る、爰はいぬる

水無月はしめつかた俄に水

あふれて田はたハさら也、家居残り無

おし流されしとかや、物おそろし

けに廣々せる野らと成、草一本

たにあらで、爰かしこに木共横

たはり、家のはしらうつはりなとまろ

はりたるいとおそろし、其折のさま

はた思ひやるたに身の毛いよたつ

斗になむ、橋のこなたに長者

屋舗の跡上るり姫の跡なと彫たる

碑は残れとも、夫かとおもふ處もなし

矢はき橋もなかはくつれ落て

岸につなきたるなと、おそろ

しさいふ斗なし、舟にて渡りすこし

行は本田の殿の御城有、大手の御門

はた石の筑垣もくつれ落、別なる

町の家々も流れたるま、くちたるあり、

あらたにみへたるも有、わつかに流れ

残りし古家のなかはゆかみたるなと

いとあはれになむ

もの、ふの矢はきの橋もさはかりの

たけき水にはあへすや有けん

行々て藤河駅も過れば、左右山々つら

なりたる松のはやしなり、右のかたなる

山の間におほくのおくつき並立

たるは、其昔今川何かした、かひうたれし

跡成とかや

つるき大刀まちえし跡と聞からに

す、ろ寒けき松風の聲

夫より赤坂の駅も過、夕つかた御油

のうまやにやとりぬ

十七日ていけよし、またきに爰を立出

吉田のすくもうち過れば、左右いと高き

岩山そひえ物すこけなるに、右の方

なる山のいた、きにた、せ給ふみ佛ハ

岩屋の觀世音と唱へていとあらた成

とぞ、いにしへ何かしの殿とかや此わたり

にやとらせ給ひし比、とみの難を

夢中に告させ給ひしによりて

其難をまぬかれ給ひしとぞ、されは

今に彼殿より年々人してもうて

させ給へるとなむ、いつの比成にや其折

荒井の海ハ俄に切入たれば、今切

と名つくと人かたりぬ、此みほとけの

いとたふとさをはるかに拝して

うち過ぬ、二川のうまやにしはしいこひ

猶行て参河と遠江の境の小河うち

わたり、向ひなるいと高き坂路に登る

爰はさるか馬場とかや物すこけなる山路

をたとりくて行ほとに、やかておる、

比いさ、か家並たり、こ、にいこひ猶行々て

白須賀の駅に出、またはるか行は

汐見坂てふいとけはしき坂路をおる、

に、はるか向ひに遠江なたと歟

いへる海みゆ、からうして荒井の駅に

行着しはしいこふほと、本陣何かし

あないして御関處に至る、乗物

のうちよりのそきみれば、関守人のいと

いかめしさ身もわな、かれぬるに、やかて

老女みへ出てあらたむ、すみて乗物を

海邊にかき出るに、いきのほと

出るもをかし、爰は吉田の殿より守らせ

給へりとぞ、されは別にみつかひ人

して何くれとあつかひ給ひ、舟なと

いとよく物せさせ給ふそかしこきや

や、舟にうち乗沖はるかに

こき出るに、波いとしつか、日の影

きら／＼とまはゆきまで照わたり、遠き

山々みわたされ其なかめはたとへん

かたなし、はやく一里の舟路を過て

舞坂のすくに着ぬ、爰にいこひて

おくれし人々を待つとへ、猶行々て

暮過る比濱松にやとりぬ

十八日ていけよし、またきに爰を立出

天龍河舟にて渡る、しはし行て池田

てふ郷のうまやに至る、爰に昔都に

めさせ給ひたる熊野と歟いへる女

おくつきなりとていと大なる碑有、

かたへなる桜は彼人のうゑおきける

となむいとゆかし

都人をしみしもむへ世に匂ふ

なれし東の花の言のは

夫より見附懸河袋井の駅もはやく

過て、夕つかた日坂の駅にやとる

十九日空くもりぬ、またきに立出て

いとけはしき坂路を登り、行道の

なからに庭注石と歟いへる有、かたち

まろらかにて東の方に向ひ南無

阿弥の文字あり、こは昔たふときひし

りの彫給ふとなむ、猶行々て左の方

に小夜の中山てふ觀音の御

堂あり、世に聞えたるたふとさおり

たちてまうてぬ、山をおり行はいと

清き小河、こは菊河といへる川の

末也と人をしへける、右の方に宗行郷

古跡とゑりたる碑あり、此郷ハ大方なら

ぬ、故ありてこ、らわたりをさすらへ給へりし

なと人の言あへるに、其存よしは  
さたかにわきまへねといと、あはれに  
おほえて

心なき人もあはれと菊河の

なかれて世々に残る言のは

夫より金谷の駅に至る、扱大井川

わたらんとて板はしふたつみつわたり

行は、けに名におへる早河のなけれ

いとはけしく、さらに目をとろく斗なり、

蓮臺にて渡るに風すさましく

顔むくへくもあらず、からうして渡り

をへて嶋田の駅にいこふ、また行々て

瀬戸河をうちわたり、藤枝のうまやも過

岡部の駅にいこひ、夫より坂路いと

けはし、爰は宇都のや嶺とかや名に

おへる鶯かつらはひまつはり、青々せる

いとをかし、山をおりまりこの駅も過行二

此あたり二木枯のもりしつはた山など

いへる名處ありとは聞つれと、いつくを

さして歟いふならん、かきりある旅はくま

なく尋へくもあらずいと口をし、夫より

阿部河もうちわたり、行々て府中の

うまやにとる

廿日空くもり風はけし江尻の駅に

至る、右の方海にて高き堤也、登りて

みるに三保の松原と歟いへる海に

さし出て、いとかすかにみゆ、爰は清見か

関の跡なるよし、猶くさ／＼の見處も

有へけれど、今朝より風あら、かなるに

此あたりは汐風いとはけしいさこ

吹たて顔むくへくもあらず、浪の音  
いとおとろ／＼しあはれ、空晴やかにて  
此海のおもてなかつたらんにはとかおもふ  
に、いと名残をし

はるかなる三保の松原みもわかす

沖つ汐風あら、かにして

清見かた浪のせき守幾かへり

人のこゝろをと、めたりけむ

からうして爰をうち過、興津河渡

るころ風すこししまりぬ、しはし行

ていとけはしき坂路に登る、爰は

さつた嶺とかやよへるとを登り、行ま、

右の方に海みわたされいとよき

なかめ也、いた、きに至ればさも廣

やかなる海の面真帆にみえ、遠うち

のはるけき山々一目にみゆるに、左の

かたに一きは高き山は明日なむ

こゆへき箱根の嶺也とぞ、遠くみる

たにいとすさましき山のすかた

なるをこゆへきほと思ひやらぬ、しはし

いこひて山をおり、ふもとの茶亭にて

昼の物なと出させぬ、爰を立出て行に

右は海にして左は家並立ていと賑し、

由井河を渡り行は此あたりハ海をうし

ろに家並たり、此家居のうしろを

田子の浦とよふとかや、蒲原のうまやも過

て不二河の渡しに至る、爰よりふし

のねいと高やかにみゆ、けふハそら

くもりたれは其いた、きハ定かならねと、

こと山にぬけ出たるすかたはさら

にたとへん方なし

か斗と思ひ懸きやふしの峯は

世にたくひなき山と聞しか

何に我たくへていはしふしのねを

またみぬ人の誠とはせむ

ふし河のなかけいとはやきを

幾とせをふるきみゆきの舞そめて

なかれハすらむふし河の水

猶行々て吉原の駅にとる

廿一日けふも空晴やかなれと爰を立

出並松のほとり過る比、不二山いとあさ

やかにみゆ

きのふけふ返りみしつ、幾度か

とへとこたへはふいの芝山

浮しまか原とかやうち過、原の駅に

いたる、沼津のすくも過て三寫のうまやに

いこふほと雨降出ぬ、爰を立出三しま

の御神にまうて、夫よりしはし

行は名に高き箱根の山へにさし

か、りぬ、いとけはしき坂路を登り行二

をり／＼雨降で、かなたこなたより雲おこり

いとくらく成、またすこし雨やみ空はれ

たる折々に駕籠よりのそけは、目も

およはぬまで高き杉ともおほひかさなれ

るさまいとおそろし、石わり坂と歟いへ

る處に至る二まろやかなる石並たる

坂なれば、駕籠かく者の杖するにも

其石にあたりてつとすへるなど、乗

物なから身もひるかへる斗わひしさ

いはん方なし、しはし登りてすこし

なたらかなる道のなからに甲石と

いへる有、其かたちによりて名づくにや

からうして行程、伊豆と相模の境と

いへるすくの本陣、亦原てふ家にやとりぬ

家のめくりは山より山そひえたれば、

梢に絶ぬ風の音、夜もすからひ、

きわたりていもねられす、いとわひし

こ、しさの行手のみかは箱根ち

は枕もやすくとられさりけり

廿二日ていけいとよし、五ツ過る比あるし

あないして御閑處に至る、御あらため

ことなくすみて過行そいとうれしき、夫より

坂路猶けはしくおり登り行ほとに、

さいの河原と歎いへる處のいとさ、やか

なる御堂にてうちならす鉦の音

澄わたりて物あはれ也、権現坂など

いとけはしきをうち過れば左の方の

山のなからに湖有、水清み渡り

て物すこして、うしの口かしの木坂

なと登りつおりつ、からうして畑

てふ處にいこふ、亦ふたつみつおり

登りて湯本といへる處に至る、爰は山中に

似けなく賑はしさ大方ならず、さま

／＼のうるはしき挽物なとひさけり、爰

を立出いと水はやき河の板橋打渡る、

是なむ此山の麓にて小田原の駅

に至る、しはし行て酒匂川蓮臺

にてうちわたる、汐見橋は右のかたに

海みえななめよし、鴨立澤の西行上

人の庵のほとり過る比は、軒はに

あさる雀色時とかやいふころなれハよくも

みす、きのふけふの山路にこうし

はて、からうして大磯の駅にやとる

廿三日ていけよし、朝とく爰を立出

もろこしか原うち過、花水橋渡る比

朝日花やかにさし出てけしきいと

よし、平塚の駅も過、馬入河うちわたり

て藤澤の駅に至る、遊行寺のほとり

にしはしいこふ、戸塚の駅もうち過

行々て、相模武蔵の境といへる坂を

こえ、ひつしの半とおもふ比程谷の

駅にやとりぬ

廿四日、空くもりぬまたいに立出て

金河の駅も過、新宿生麦などいへる

村々を過、川崎にしはしいこひ

夫より六郷河わたり、大森鮫津も過

品川の駅にいこふ、かくてむかへの為

よへよりこ、にまたせ給へりとして

母刀自はしめはらからんと、まうきま

し、其うれしさ、中々言尽す

へきにあらす、うちくつろきて

みきなど出させ絶て、久しきたいめを

かたみに喜び聞えつ、尽ぬ物語

に時うつりぬれば、爰を立出、海辺を

たとり／＼て高なわも打過、芝口と歎いへる

處にて迎への人々ハこ、にて別を告、

家に帰もあり、猶送るもあり、扱みたちへ

といそくほとけに、大江戸の賑は

しさ、鄙の長路に引かへていと目覚し

生出し處といへとあまたの年月立

ては、何くれと其さまかはり、みる物聞物

いとめつらかにおほえて、只うひなる

心地するもをかし、扱夕つかた此みたち

に帰り着しに、爰にも人々うち

つとひ待喜び聞えつ、長き旅ねに

つ、みなかりしを、かたみいはひは、

れていつはつへくもあらぬそなへての

心ならんかし、難波にて人々に別れ

しはきのふけふとおもふにはやくも

東に帰、かく人々に絶てひさ

しき物かたりにかたみいおもかはり

ぬるよなど、おなし事のみいひて日を送る

も只夢のことくになむ、かゝる嬉しき

中にもさきつとし父はた兄さへに

はかなくならせ給へりしそあかすかな

しき、けに常なきは人の世の習

とおもふ物から、何くれと思ひ出る事のみ

おほくして今さらに袖しほり、

あへねもかひなき業そかし

ありしにもあらぬ古巢に帰り

来ていと、音に鳴谷のうくひす

さためなき世とはしる／＼ふる郷へ

帰て物をおもふ今日かな

かくて後は世のことわさのしけさまざりて

すける道すら捨るとにはあらで

いつしか師の君の御もとへ松吹風の

音つれさへ絶々に成にしそかひ

なきや、されはあつめし文もいたつらに、

しみてふ虫の往家とや成ぬらむかし、

こそ神無月斗、師の君の御もとに

此年比音つれ参らせさりしおこたり  
をわひ聞え参らせければ、ありしに  
かはらぬみこゝろはえをいとこま／＼と  
書つゝけ給て

海山を隔しほとはかく斗

おほつかなくは過ぎさりしを  
おなし年の霜月半、ある人の

もとより都なるやんことなきわたりに  
しるへ有は歌書てさゝけよ、かならず  
御草そへさせ給ふへしなと人していひ  
おこせぬあれと、わらはもとより文まなひ  
しとにあらねはいかてさることの  
侍らんや、よきにまうしてよと

すまひぬれと、猶せちにいはせける  
まゝ、さのみはとて書ぬ、其としも暮て  
今年睦月の半斗、都なる彼わたり  
より、わらはか歌愛させ給ふのよしおほ  
せ給はりて

むさし野のいかなる種そをみなへし  
遠き都に匂ひ来ぬるは

一すちに分こし人をするへにて

まよはすたとれ敷鶯の道

かくなむおほせ給へりし、いとおほけな  
き身のめいほく、何にかはたとへつ  
へき、さはあれつたなき心には言へき  
事もえわきまへねと

おもひきや遠き雲井の花の香を

かゝる袂にとゝむへしとは

是ひとへに、師の君の年ころをしへ  
道引給ひしことの保からねは、かゝる

ことこそとあるにもあられぬ、かしこ  
さにかくと告参らせしに

師の君もこよなうよろこはせ給ひて  
おなし月の末のみかといへるに、ゆくり無  
とはせ給ひて

雲よりもりくる月にみかゝれて

ひかりそはれる玉の横山

玉の横山はむさし野の名處也、そを  
わか氏にかけ給へるなるへし、  
十とせあまりの昔物かたりに春の日も  
みしかう暮て帰り給ひぬ、夫より後は  
をりくの御題なども給はれは、いさゝ村竹  
ふしなき事共いひ出つる物から

ぬは玉のやみちをたとるはかなき身  
に、言の葉竹のいやしけなるをも  
をしへさとし給ひなは、我世に  
いけるさちなりとおもふまに／＼かひ  
つけし、草のはこひも言の葉も、いと  
つたなさを返り見なきをこなるわさよ  
と、人々わらはせ給ひなむかし

かきつめし磯のもくつに言のは

のひかりをそへよ和歌の浦浪

いさやみむ和歌のうら波

かきわけて藤に

ましはれる

玉の光を

湘清

あつまのつと 終

わさよと人二笑はせ給ひなむかし

かきつめし磯のもくつに言のはの

ひかりをそへよ和歌のうら濱

路子

歌よみ習ひしに、始めてやんことなき

あたりに名譽ありしに、をはれる事

いとをかし／＼とりなされたり、いかて

右の卷々はやく書あらたまへ

この寺の殿にもいみしうゆかしからせ

給へはとくまゐらせてん

(異筆)

へいてやみむ

和歌のうら波

かきわけて

藤にましはれる

玉の光を

湘清

